

子どもの人権連第23回「子どもの権利条約具体化のための実践」助成事業
及び東日本大震災等大規模災害特別助成事業助成

大学生による被災地域における 子どもの居場所づくりに関する フィールドワーク事業 報告書

一般社団法人東日本大震災子ども・若者支援センター
東北福祉大学 総合福祉学部社会福祉学科
リエゾンゼミⅢ (担当清水冬樹)

はじめに

本報告書は、子どもの人権連第23回「子どもの権利条約具体化のための実践」助成事業及び東日本大震災等大規模災害特別助成事業の助成を受けて、主に仙台市内の大学生による東日本大震災後の子ども・若者支援の今後のあり方について、大学生自身が課題を見つけ、解決に取り組むことを目的として、1年間の活動を報告するものです。本来であれば多くの大学生に参加を求めてきましたが、コロナ禍にあり、事務局的に活動をしてきた東北福祉大学清水冬樹ゼミの学生による活動となりました。多くの若者たちが東日本大震災の教訓を体験的に学ぶことを支えるのも当センターの一つの目的であり、その取り組み方については今後の大きな課題となります。

しかし、この事業に参画をした学生の取り組みは大変ユニークなものでした。一般的にフィールドワークは、ある一定の期間に1～2回程度訪問し、そこで得たことを言語化していくといった取り組みが一般的です。しかし、東北福祉大学の学生は、大学近隣のコミュニティスペースを手がかりとしながら、定期的な子どもの放課後支援を実践し、かつ都市部と津波被害が大きかった沿岸部へのフィールドワークを通じて、面として被災地を捉えつつ、震災の課題の解決の糸口を探そうとしてきました。その成果は、まだ時間をかけて言語化する必要がありますが、コロナ禍への配慮や限られた大学生活の時間をこうしたフィールドワークにかけて得た知見は、被災地や今後も起きるであろう大災害時の子ども・若者支援の具体的な担い手として活躍する種となると考えられます。

大学生の取り組みを大変多くの方々に支えていただきました。projectMの小野寺翔さん、一般社団法人気仙沼あそびーばーの鈴木美和子さん、千葉開生さん、白幡みゆさん、NPO法人ベビースマイルの荒木裕美さん、NPO法人TEDICの鈴木平さん、石巻市子どもセンターらいつの吉川恭平さん、子どもの放課後支援の場を提供いただいた国見・千代田のより処ひなたぼっこのみなさま、そして何よりひなたぼっこに足を運んでくれた子どもたちに心から感謝申し上げます。

当センター、ならびに若者たちのこれからの取り組みを引き続き応援いただきますようどうぞよろしく願い申し上げます。

2023年3月11日
一般社団法人東日本大震災子ども・若者支援センター
代表理事 足立 智昭 (宮城学院女子大学)
事業担当 清水 冬樹 (東北福祉大学)

目次

概要.....	1
第1章 6月の活動.....	1
【計画立案に至るまでの経緯】	1
【材料】	1
【準備段階での声】	2
【活動内容】	3
【チラシ】	3
【当日のスケジュール】	4
【活動当日】	4
【当日の様子】	4
【学生の感想】	5
【6月の活動の振り返りと考察】	6
第2章 南三陸・気仙沼.....	7
はじめに.....	7
小野寺翔さんのお話を伺って	8
気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館	11
気仙沼あそびばー	14
第2章 石巻.....	17
はじめに.....	17
ベビースマイル石巻 issyo.....	18
NPO法人 TEDIC	20
石巻市子どもセンター らいつ.....	21
第3章 11月の活動.....	23
【活動内容】	24
【準備段階での声】	24
【チラシ】	25
【当日のスケジュール】	26
【活動当日】	27
【当日の様子】	27
【カメラワー】	28
【マグネット磁石】	29
【学生の感想】	30
第4章 12月の活動.....	33
【計画立案に至るまでの経緯】	33
【準備段階での声】	35
【活動内容】	35
【チラシ】	35
【チラシの写真】	36

【当日のスケジュール】	37
【12月15日活動当日】	38
【当日の様子】	38
【活動の様子】	39
【保護者に向けたアンケートの結果】	45
第5章 報告会 & インタビュー	50
第6章	54
まとめ	54

概要

「子どもの居場所作りをより実践的に行う」ことを今年度の清水ゼミでの目標とし、一年間の活動を行いました。同時に、そのために必要な子どもとの関わり方・社会の現状への理解を深めることも重要視し、学びながらの実践を目指しました。

子どもとの関わりの実践の具体的な手段として、「ひなたぼっこ」の居場所をお借りして地域の小学生を対象としたイベントを開きました。ゼミでは昨年度より「子どもの居場所作り」についての研究と実践を重ねていましたが、昨年度の1回のイベント回数に対し、今年度は6月11月12月と、3回の実践の場を頂き、知識と学びを踏まえた子どもの居場所作りを実践してきました。

ひなたぼっこについて――
まちの人が集い、食事や会話、娯楽を楽しみながら、地域に新たな元気や活力を生み出してもらい、きっかけを生み出す「まちの広場」です。子どもも、高齢者も、しょうがいのある人も、「誰もが地域で自分らしく」暮らせる地域社会を目指して活動しているNPO法人、特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター (CLC) が主催しています。
主な活動内容としては①お茶やお菓子の提供②玩具や絵本、囲碁や将棋などを揃えた場所の提供③町内会やサークルなどの活動の場の提供④お食事会や晩ごはん会です。様々な人との交流・活動の場を創造し、まちに住む人たちが楽しく集える広場として活動されています。

子どもの居場所に関する社会の現状への理解を深める手段としては、夏休み期間を利用し居場所作りを行う関係施設を訪問・見学しました。

特に、震災を経て子どもの居場所作りを行っている宮城県の沿岸部に着目し、南三陸・気仙沼、石巻の地域の情報を集め、学生達の学びたいことを中心に見学施設を決定しました。

沿岸部の子どもの居場所の背景には震災が存在しており、私たちが小学生の時に経験した震災について、改めて向き合う機会となりました。

天災により「子どもの居場所が突然に奪われる」という状況は、緊急事態宣言によって始まった外出自粛、大人数での集まりが制限されるコロナ禍に置ける状況と共通する部分があると考えます。そうした中、私たちが大学生ができることは何なのか、子どもの居場所作りとしての機能についてゼミのメンバーがそれぞれに考え、学びを深めました。

第1章 6月の活動

【計画立案に至るまでの経緯】

目標・テーマ

実験やお菓子作りを大学生と子どもが共に行い、子どもとの関わり方を体験する。

話し合った内容

昨年の活動を振り返って、パンケーキなど安全面を配慮して学生から子どもへの一方通行な活動になっていると懸念していました。そこで、今回の活動では、子どもと一緒に取り組むことができるプランを立てようと話し合いました。

目的

「子どもと同じ目線に立って、活動を共にする」このような想いをもって、子どもと関わることを目的にしました。子どもに体験（経験）してもらうことで、日常ではなかなか手に入れることができない経験値を得てもらいたいという狙いがあります。

どうしてその遊びの計画に至ったか。（スライム作り、カルメ焼き）

一概に「居場所の提供」だけでは、子どもたちに特別な空間を創り出すことはできません。そこで、非日常的な体験をして欲しいという想いから、実験をしようと決めました。また、遊びを通して、大学生と共に「食」も共有することで、より距離が近くなるのではないかという話がありました。そこで、型抜きを行いながら、楽しい空間で食を共有したいと思い、このような計画を立案しました。

【材料】

○カルメ焼き



砂糖



重曹



型



クッキングシート

○スライム



洗濯糊



絵の具



ホウ砂

【準備段階での声】

(学生の活動報告より抜粋)

○準備の様子(苦労したこと 工夫したこと 大変だったこと)

教室での準備とひなたぼっこでの準備の様子

- ・コロナウイルスのことや食べ物を提供するにあたってのアレルギーなど注意点を考えました。
- ・スライムの分量調整に苦戦。分量を変えながら、明確な成功法を実験しました。
- ・想像以上にカルメ焼きを作るのが難しいことを後々知ることになり、準備に苦労しました。何度も試行錯誤を繰り返し、ベストな作り方を見つけて、当日までに大量生産しました。タイマーを使って時間を測るなどして、正確に同じものを作れるように工夫しました
- ・カルメ焼きがなかなか成功しなくて苦労しました。焼きすぎると苦くなったり焼かなすぎるとふにゃふにゃになったりと焼く時間の配分が難しかったです。最終的には、材料の配分とどのくらいの色になったら取り出すかなどのコツをつかむことが出来ました。
- ・教室での準備は購入品の個数を決めました。ひなたぼっこではスライムの試作を何度も行いました。
- ・子どもの来る人数がわからなかったから材料をどれくらい用意するかわからなかったです。
- ・作り方通りにやってもなかなか成功させることが困難でした。
- ・どの工程から子どもにやらせたら安全かを考えました。
- ・こどもがどのような行動をとるかを予測して、必要となるものを用意しました。
- ・子ども達が喜ぶもの、流行っているものを取り入れたいという意見でイカゲームの中に出てくるカルメ焼きを設定しました。
- ・YouTube でみて、材料や型を用意して、ひなたぼっこで何度か挑戦したが、量や焼き加減で形になるまでの挑戦が必要だったため、安全の観点からも子ども達ではなく、あらかじめ用意したものを子どもたちに遊んでもらうという形になりました。

○当日の準備は何をした？どこを担当した？

- ・子どもの検温、名簿記入。
- ・スライム作りにおいて、子どもたちがスムーズに作れるように先に材料を混ぜて準備した。
- ・カルメ焼きはもともと作って置いたので、椅子とかを動かすなどの準備をしていました。
- ・熱湯を使うことがあったので危険回避のため冷まして準備をしていた。
- ・お湯や重曹などは子どもの前では使うことがないように開始前に準備した。

【活動内容】

学生と子どもと一緒にスライム作りやカルメ焼きの型抜きゲームを行う

【チラシ】

<対象児>

ひなたぼっこを利用・場所を把握しており、ひなたぼっこに徒歩で来ることのできる距離に住む小学生

<チラシ配りの期間>

開催日前週の2日間



<子ども達の様子> (学生の活動報告より抜粋)

○チラシ配りには参加した？その時の子どもの様子

- ・ひなたぼっこの認知を確認できました。
- ・参加に意欲的な声が多かったです。
- ・習い事があって参加できないという子どももいました。開催日程の改善あり。
- ・開催場所を確認しに来てくれる子がいました。
- ・去年の活動もあったため、すんなりと配ることができました。
- ・大学からの申請も通しやすく、昨年よりかは安易に済ますことができました。
- ・元気いっぱい。高学年の子には会っていません。

【当日のスケジュール】

6月15日（木）

時刻	活動	準備物
15:30	大学生 ひなたぼっこに集合	
16:00	子ども達到着	名簿
	①スライム作成 ②カルメ焼き作り・食事。 ③自由遊び	①（材料）洗濯糊、絵の具、ホウ砂 ②（材料）クッキングシート、ホットプレート、重曹、型、竹串
17:40	活動終了。大学生 片付け。	
18:00	子ども解散 大学生最終の片付け	ゴミ袋 ウエットティッシュ

【活動当日】

参加人数 小学生 5人
保護所の子ども 2人
大学生 11人

【当日の様子】

・来てくれた子どもが少なかったことで、時間を持て余す学生が少し出てしまった。

・子どもに向けて多くの指示を出すことがないように、子どもの意思を尊重しようと心がけました。

・好きな絵の具を選ぶ際に、使いたい絵の具が被った子には順番に使うことや、譲り合えるような話し合いの場を設けるよう心がけし、問題が起きないように気をつけました。

食べる際には座って食べること、食べる場所を明確にし、子どもたちにも伝えました。

・型抜きを行っていたので、「上手い！上手い！」などとプラスの言葉をかけることを意識していました。子どもたちが自分の意思で絵の具の色を選ぶことができるように1人1人に声をかけ、使う順番を決めるなどのアドバイスをした。次回このような企画があったらどんなことがしたいのか、周囲でどんなことが流行っているのかなどを聞きました。

・三人の女の子が同時に話しかけてくれ、一人の子が他の二人の勢いに負けて話したいのに少ししか話せていなかったため、均等に話を聞くことを意識して関わりました。一時保護の男の子は、多く話すタイプが出なかったため、同じテンション感で話すことを意識しました。小さな女の子に対しては、おもちゃの部品が落ちていて食べようとしていたりしていたので、遊びながら危険に配慮しました。

・何か作業をする際は、子どもたちの要望通りに行えるように安全面に配慮しながら話をするように意識しました。



【学生の感想】

よかった点

・子どもとの関わり方の面で、ただ関わっていくのではなく、意識したうえで専門的に、学んでいく必要があると感じました。

・カルメ焼きは、準備がいかに大切かを身にしみて感じました。カルメ焼きは簡単だろうと思っていたのですが、かなり難しく準備期間は全て試行錯誤に費やしていました。結果、コツをつかみいい状態で提供できたので良かったです。型抜きは難しかったように思いますが、子ども達が楽しく取り組んでくれていて嬉しかったです。

改善する点

・計画立案の段階でだれがどのように動き、配置をどう工夫するか等の同線の確認が不十分でした。

・一時委託の子どもたちとの関わり方が難しいと感じました。事前に情報収集を行い、全体で共有することが大切になると感じました。

・絵の具の取り合いになることを事前に予測しておくことで、同じものを複数用意することや大学生の担当配置に関して、改善の余地があると感じました。

気づいた点

・子どもは一つのことに集中すると周りが見えなくなるため、絵の具を元の位置に戻さなかつたりしていたので、それをうまく誘導する方法を考えなければならぬと感じました。

(学生で話し合った結果：事前に一度に使う量や片付ける場所を明確にすることで解決できると判断)

- ・準備段階から、大人の視点で物事を考えるのではなく、子どもの視点から何が必要なのか、何を準備すべきかを考えることが大切だと感じました。
- ・前期の活動は1回だけで、当日に向けての準備期間が長くありました。振り返ってみると、この準備期間がいい方向にも悪い方向にも影響を与えてしまうと感じました。いい点としては、時間があることにより、準備にかかる時間が取れ、特にカルメ焼きは成功するまでしっかり時間をとれました。悪い点としては、時間が長いが故に、学生の準備に対する負荷に差が出ていたと感じました。
- ・一時保護所の子がいることがはじめてで、それについても全体で共有できていないままの活動だった為、フレンドリーに会話してしまい個人情報を引き出してしまおうといった問題が起こってしまいました。そこで、必要事項を事前に共有することが大切だと学びました。絵の具の取り合いになったことについて振り返りで、取り合いになったときのために同じ色を何個か用意すればよかったという意見が出ましたが、喧嘩にならないように先回りしてこちらが環境づくりするよりも、そうなったときに解決することを手助けできるような対応ができればよかったと感じました。

【6月の活動の振り返りと考察】

6月の活動は総合的に見て、不完全燃焼であると感じました。しかし、これは決してマイナス評価をしているのではなく、多くの改善点や成長性を見込んだうえで感じたことです。前期は1回の活動で、長い時間をかけて準備をしてきました。しかし、全体での情報を共有できていないことや活動に真摯に取り組む学生が決まっており、「自分がやればいいや」と判断することで、平等な負荷をかけながら取り組めていなかったことについて話し合いました。また、当日来た子どもがかなり少ないことから、その場での立ち回りをどうすればいいかわからない学生もいました。この学生メンバーで活動するのも初めてだったこともあり、情報共有や今後の対策に関しては、より活動を進める中で親交を深められるといいなと感じました。以上のことからこのゼミはまだ発展途上にある状態で、今回の反省を活かし、次回に活かすことで、常に燃焼し続けられる内容を作りたいと感じました。

第2章 南三陸・気仙沼

南三陸・気仙沼施設見学について

杉下滉弥 赤間るり 岩元英華 及川聖奈 熊谷柚衣 佐藤春菜

はじめに

目的

小野寺さんに話を伺った目的は、当時中学生だった時に震災を経験したことから、津波に遭った人たちの当時の状況を学び、避難生活をしてきた子どもたちの様子などを聴くためです。伝承館を訪問した目的は、東日本大震災で仙台市より被害を受けた太平洋側の状況から当時の支援方法や後から考えられた支援方法を学ぶためです。あそびーばーを訪問した目的は、地方でできる支援と仙台市など都市部で行える支援の違いと都市部と地方とでの人間関係のあり方を学ぶためです。

日程・訪問先

8/24（水）

移動手段はレンタカーを使用し、午前に南三陸で林業を営む小野寺さんのお話を伺いました。午後に気仙沼にある伝承館とあそびーばーというプレーパークを見学し、お話を伺いました。

時間	所要時間	プログラム
8:50	—	仙台駅集合
9:00	2時間	仙台駅発
11:00		小野寺さんが働いている場所着
	1時間	小野寺さんのお話を伺う
12:00	20分	小野寺さんが働いている場所発
12:20		南三陸さんさん商店街着
	1時間	お昼ご飯を食べる
13:20	30分	南三陸さんさん商店街発
13:50		気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館着
	1時間20分	気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館を見学する
15:10	10分	気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館発
15:20		気仙沼あそびーばー着
	50分	気仙沼あそびーばーを見学する
16:10	10分	気仙沼あそびーばー発
16:20		道の駅大谷海岸着
	15分	休憩
16:35	2時間35分	道の駅大谷海岸発
19:10	—	仙台駅着

小野寺翔さんのお話を伺って

概要

小野寺翔さんは、中学二年生の時に被災しました。大学生が被災地に来て学習支援を行ってくれたことで、居場所が確保されました。しかし、震災のことを思い出させてはいけないという周りの配慮によって、気持ちを話せませんでした。高校生の時に語り部の活動を始め、真摯に話を聞いてくれる人たちの存在があったことで、気持ちを話すことができるようになりました。そして、震災の経験を語り継ぐことの大切さに気付きました。小野寺さんは大学に進学した後、林業の専門学校に入学しました。祖父が山を所有しており、震災を経てもなくなるものがなかった財産を守っていきたいという思いから林業を始めました。

学んだこと・感じたこと

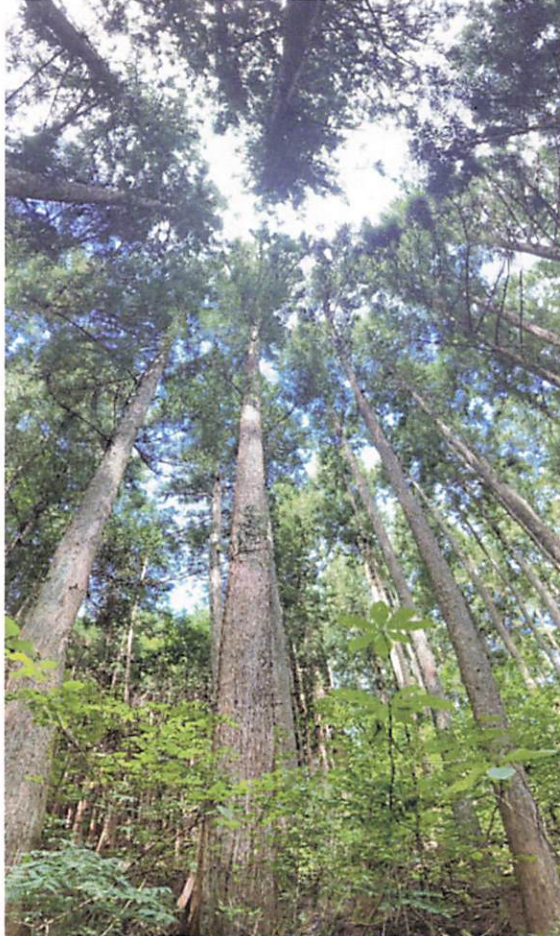
中学二年生の時に被災した小野寺さんの話を聞いて、有事の際の学習支援の在り方について、特に二つのことを学びました。一つ目は、震災と学習支援との関わりにおいて、学習支援という居場所の利用を、利用者が選択できることが大切であることを学びました。施設の設置や取り組みの実施により、支援する体制が整っていることが被災者の安心感に繋がっていると思いました。二つ目は、子どもたちにとって、話を真剣に聞いてくれる、友達でも、家族でも、先生でもない第三の大人の存在が大切だということ、改めて学ぶことができました。私たちは、ゼミの活動で支援等における第三者の大人の重要性について学ぶ機会が多くあります。しかし、実際に第三者の大人と関わってどう感じたのかを聴くことができ、支援の方法の在り方について詳しく学ぶことができました。同時に、支援が提供される場に偏りが生じてしまうことが課題点として分かり、偏りが出ないための方法を今後の活動に向けて考える良い機会になりました。

お話を伺っている様子



小野寺さんが働いている場所でお話を聞いている様子

小野寺さんの仕事場である山林の様子



木の太さが均等になるように近くに生えた木を伐採していることや、木の切り方について教えていただきました。

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館

概要

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館は、将来にわたり震災の記憶と教訓を伝え、警鐘を鳴らし続ける「目に見える証」として活用し、気仙沼市が目指す「津波死ゼロのまちづくり」に寄与することを目的としています。（「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」<https://kesenuma-memorial.jp/> 2023年1月28日閲覧）

気仙沼向洋高校旧校舎が被災したままの形で残っていました。旧校舎では津波によって被害を受けた教室を見たりクイズラリーを行ったりすることができ、隣接する施設では震災時の映像や被災した方々のインタビュー映像を見ました。

学んだこと

実際に被災した現場がそのままの状態が残っていたため、津波の怖さを改めて実感すると同時に、津波の被害にあった当時の子どもたちがどのような心境だったのかを考えるきっかけになりました。ゼミのメンバーも東日本大震災を経験した人は多かったのですが、津波を経験した人はいなかったため、伝承館で映像視聴や旧校舎見学を通して当時の状況について詳しく学びました。当時の背景を深く知ることにより被災した子ども達に対しての居場所づくりの大切さを感じられたため、被災地で居場所づくりを行っている施設を見学する際より充実した学びを得ることが出来ました。

感想

沿岸部の被災状況をしっかりと把握していたわけではなかったため、見学をして衝撃を受けました。伝承館では、初めに地震直後から津波発生までの様子を映像で観て、その後気仙沼向洋高校旧校舎を見学、最後に震災を経験した人たちの現在の映像を視聴しました。最初に観た映像では、先程までいた建物が津波に飲み込まれていく様子を撮影したものだったり急いで高台に避難している人が映されていたりと津波の威力と怖さを感じることが出来ました。校舎見学では、ここが本当に学校だったのかと思わざるを得ない光景が広がっており、息が詰まるような感覚に襲われました。屋上以外は津波の被害を受けていて、ここに通っていた高校生たちは津波発生時やこの変わり果てた学校を見てどのような気持ちになったのだろうと思い胸が苦しくなりました。最後に観た映像では、家族が津波に流されてしまった方々のインタビューが流れていて、苦しみながらも希望を持って生きている姿に感動しました。伝承館には沢山の中学生や高校生などが見学に来ていて、付箋のような物に学生達の感想が書かれてありました。津波があったことを覚えていない世代や経験していない世代に震災のことを伝えていく事の重要性を感じ、自分たちも語り継いでいく必要があるなど再認識させられました。想像以上の大きさで被災をしていた沿岸部の状況を知ることが出来てとても勉強になりました。

実際の写真



この写真は、3階の教室に車が流れてきたものになります。当時のまま残されているのですが、ここが教室だったとは思えないほどの光景になっていて、津波がいかに凄まじい威力だったのか想像することができます。



校舎と校舎の間に折り重なった車があり、校舎の外にも多くの物が流されてきた様子がうかがえます。

パンフレット



気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館入場後に、こちらの入館チケットとパンフレットを頂くことが出来ました。パンフレットにはガイドマップが記載されていて、中には伝承館の近辺にいた際の避難場所が書かれている避難マップの紙が1枚入っていました。

気仙沼あそびーばー

概要

東日本大震災があった当時、地域のいたるところにがれきがあり、学校の校庭には仮設住宅の建設がはじまろうとしており、子どもたちの遊ぶ場所はなくなってしまっていました。また、被災地の大人たちは、家族を養っていくことに必死に追われる日々で、子どもたちのことまで手が回っていませんでした。そこで、NPO 法人日本冒険遊び場づくり協会の方から「子どもたちの心のケアのために、遊び場を作らせてほしい」と言われたことがきっかけとなり、2011年4月に気仙沼あそびーばーが設立されました。あそびーばーでは、津波で一度流されたふるさとを、輝くような楽しい思い出のふるさとに育てていきたいという思いがあり、外でのびのびと遊べる環境が少ない東北地方に、遊び場のモデルとして、「遊ぶ」大切さを広く伝えていき、子どもたちはもちろん、親もお年寄りも集える、子どもを中心としたコミュニティの場作りを目標として掲げられています。

気仙沼あそびーばーの会

<https://asobi-ba.wixsite.com/playpark> (2023. 1. 27 閲覧)

実際の写真



小屋に設置してある「あそびーばーの目的」です。

学んだこと・感じたこと

最近の公園は、大人の視点からみて危険だと判断される遊具は撤去されたり、遊びに制限をかけられたり、子どもがけがをする前に危険を取り除いておくことが多いように感じます。しかし、今回訪問させていただいたあそびーばーでは子どもが主体となって遊びを考えたり、遊びたい遊具を自ら創作したりと、制限のない遊び場が提供されていました。危険だからといってただ使用を禁止するのではなく、大人が近くで声かけをおこないながら子どもの遊びを見守り、遊び方を間違えるとどのような危険が生じるのかを子どもたち自身が考え、安全な使い方で遊びのルールを考えていました。また、既存のルールで遊びをおこなうだけでなく、あそびーばーに集まった他学年の子ども同士で遊びのルールを考え、様々な新しい遊びをおこなっていました。私たちの活動では、事前に子どもたちに起こり得る危険やトラブルを予測し、実際に危険やトラブルを回避するための準備をおこなっていました。しかし、あそびーばーの活動では子どもたちが自らの危険を予測し、遊びのルールを考え、失敗や困難をできるだけ自分たちで対応する力を引き出していました。大人には子どもを危険から守る役割があると考えますが、子どもの主体性を高めるためには、大人が決めたルールや規則で子どもを縛りすぎることなく、自由な空間での遊びを経験させることも必要なのではないかと感じました。あそびーばーでは他学年と交流することができるだけでなく、どのようなことが起こり得るのかを考える力や自分たちがしたい遊びを考え実行するという主体性を育むことができると感じました。

そして、子どもが着なくなった洋服を持ち寄って「おさがり会」を開催したり、あそびーばーで獲れた野菜を販売したりなど、あそびーばーの活動が子どもたちの遊び場・居場所となるだけでなく、保護者の方や地域の方の交流の場所ともなっていることが分かりました。保護者の方にとって交流できる場所があることは、育児に対する不安や悩みなどを周りに相談することができたり、子どもから少し離れて一息つくことができたりと安心できる場になっているのではないかと感じました。また、普段は仕事をしていて子どもとのコミュニケーションを取ることがなかなか難しいと感じている保護者の方もあそびーばーのイベントなどを通して親子の交流が図ることができるところもあそびーばーの魅力だと感じました。あそびーばーの活動は、被災地の子どもたちに限らず、コロナ禍で自由に身動きが取れない子どもたちにとっても他にない特別な居場所になるのではないかと思います。

実際のあそびばー



小屋の壁には子どもたちが描いたイラストがありました。建物の中には、公園ではあまり遊ぶことができない手作りの弓矢など手作りのおもちゃが置かれ、屋根の上に乗ることができ、滑り台で降りることができます。



小屋の上から見える景色です。

第2章 石巻

石巻の見学について

岩間陽 牛田修滋 杉下滉弥 及川聖奈 片倉渚
熊谷柚衣 佐藤春菜 角崎詩歩 山田志織

はじめに

目的

ベビースマイル石巻でお話を伺った目的は、子ども支援と保護者支援の具体的な方法を学ぶためです。TEDICでお話を伺った目的は、NPO 法人の方にお話を伺うことと法人から地域への働きかけを学ぶためです。らいつという石巻子どもセンターでお話を伺った目的は、昨年見学に行っていないゼミ生を交えて、どのような活動が行われているのかを学ぶためです。

日程・訪問先

9月13日(金)

移動手段はレンタカーを使用し、午前にはベビースマイル石巻でお話を伺い、午後にはTEDICと石巻子どもセンターでお話を伺いました。

時間	所要時間	プログラム
9:15	—	仙台駅集合
9:30	1時間	仙台駅発
10:30		ベビースマイル石巻 issyo着
	1時間50分	荒木さんのお話を伺う
12:20	10分	ベビースマイル石巻 issyo発
12:30		春潮楼着
	40分	お昼ご飯を食べる
13:10	車と徒歩	春潮楼発
13:20	10分	特定非営利活動法人TEDIC着
	1時間40分	鈴木さんのお話を伺う
15:00	徒歩6分	特定非営利活動法人TEDIC発
15:06		石巻市子どもセンター着
	1時間	石巻市子どもセンターを見学する
16:10	1時間	石巻市子どもセンター発
17:10		仙台駅着

概要

学んだこと・感じたこと

ベビースマイル石巻は、ベビースマイル石巻は 2011. 3. 11 の東日本大震災によって、大きな被害を受けた「石巻」の妊産婦～未就園児親子の子育て支援団体です。

大震災により被害を受けた親子の笑顔を守るため復興に向けて作られたサークルになります。当事者として活動を始めて1年が経つ頃、マタニティ～未就園児親子の子育て支援において、石巻圏における当団体の継続の必要性を強く感じ、地域に根差した活動をしていきたいと、NPO 法人を取得しました。活動は当事者を中心としたメンバーで運営しています。

当事者だからこそできることを楽しく子育てしながら活動することで、子育て仲間をエンパワメントし、地域の皆様を大きく巻き込んだ子育てしやすいまちづくりの実現に向けて若い力で積極的に事業展開しています。

親子の孤立化を防ぎ、心身共に安心してゆったりと子育てができるようベビースマイル 石巻では、音楽に合わせて子どもとスキンシップを楽しむ「親子ピクス」や「リトミック」、「ベビーマッサージ」や「親子ヨガ」、震災でダメージを受けた「心のケア」などのイベントを企画し、定期的におこなっています。

その活動をとおして、母親同士がつながり、きずなを深めると同時に、団体として、行政・医療・地域とつながり、親子が社会から孤立するのを防ぐことにもつながっています。

さまざまな角度から子育てを楽しむ場を、一生懸命つくりあげることがベビースマイルの発足のおおもとにあります。

感想

ベビースマイルでお話を聞いて二つのことを学びました。

一つ目は、人との繋がりがニーズの把握や居場所づくりに大きく関わっていることです。

支援活動を通したニーズの把握は、自分から直接見聞きした情報だけでは提案することが難しいニーズの把握に繋がります。そして、ニーズを把握していくことにより多くの支援者が利用しやすい居場所をつくることができると私たちは考えました。

二つ目は、母親や父親に焦点を当てた支援が必要だということです。子どもに対する支援のみならず、保護者にも支援対象を広げることにより、虐待から子どもたちを救えるのではないかと考えました。子どもへの虐待の要因の一つとして、親が過度なストレスや不安を感じることで、弱者である子どもに当たってしまうのではないかという意見に共感し、同じ境遇にいる者同士で話すことにより、ストレスや不安を軽減させることができ、結果的に親だけではなく子どもも救うことができる取り組みだと考えました。

パンフレット ベビースマイル

石巻市子育て世代包括支援センター
いっしょIssyo

妊娠・出産から 子育てまでの 切れ目のない支援

石巻市にお住まいの妊娠中の方、0才～18才未満の子どもの子育て中の方、子育てに関わる方などなたでも相談できます。「誰に相談したらいいの?」「ちょっと困ったな...」「知りたい、聞きたいことがある」というとき、いっしょスタッフが話を聞いてあなたに必要な情報、サービス、人、居場所などへ適切につなぐお手伝いをします。ご利用は無料です。

あなたの子育てをいっしょに

Issyo 01

スタッフが
お話を伺いながら
いっしょに考えます。

Issyo 02

妊娠中の方、
0才～18才未満の
子どもの成長を
いっしょに見守ります。

Issyo 03

ひとりひとりに合わせて
関係機関といっしょに
支えます。

1人1人個別に
子育てのいろいろな悩み

- ◆赤ちゃんを育てる自信がなく不安
- ◆母乳のとり方、離乳食の悩み
- ◆お世話を仕方がアゲアゲしてほしい
- ◆育児後の仕事復帰が心配
- ◆一緒に子育てを楽しむ仲間がほしい
- ◆子どもの発達が進まない
- ◆核家族の悩み、両親の悩み
- ◆石巻に引っ越してきたばかりで子育て情報が欲しい
- ◆用事やリフレッシュでちょっと子どもを預けたい
- ◆子どもと遊んでみたい
- ◆2人目、3人目の出産や、産後の生活が不安
- ◆ひとり親での子育てについて
- ◆妊娠中に参加できる講座やイベントが知りたい
- ◆経済的な悩み
- ◆夫婦関係
- ◆保育園、幼稚園、学校での悩み
- ◆産前産後の子どもの預かり方など

どんなことでもお気軽に

情報提供します

- ◆各種パンフレットやチラシをそなえています。
- ◆スタッフがあなたに合った情報をおすすします。
- ◆ご自由にお持ち帰りいただけます。

相談ができます

- ◆お話ししやすい環境でスタッフが話を伺います。
- ◆来所相談のほか電話相談、メール相談なども受け付けています。
- ◆保健師や社会福祉士など専門的な方と関係機関へつなぐこともできます。
- ◆安心してつなげるようにお手伝いします。

相談内容に関する秘密は守りますのでご安心ください。

「孤育て」にならない 仕組みをつくらう。

「孤育て」とは、子育て世代が孤立し、支援を受けられない状態を指します。支援を受けられない状態は、子育て世代の生活に大きな影響を与えます。支援を受けられない状態を防ぐためには、支援を受けやすい仕組みをつくらう必要があります。

- パートナーと協力して子育てに取り組んでいる。
- 孤独や不安を抱えない子育て環境になっている。
- 子育てでの交流手段が増えている。

これから

- ・産後ケアの充実
- ・家庭訪問型子育て支援ホームスタート
- ・ひとり親支援多施設連携

子どもの権利を柱に、 子どもの「生きる」を支える。

子どもは生まれながらにして権利を持っている。子どもは「生きる」権利を持っている。子どもは「生きる」権利を持っている。子どもは「生きる」権利を持っている。

- 妊娠前から18歳までの切れ目のない支援がある。
- 子どもの育ちにあった居場所が整備されている。
- 子どもの声を聴く大人が地域に増えている。

これから

- ・子どもの居場所づくり（放課後児童クラブ、フリースクール、一層が広がるともなくても）
- ・子どもの貧困対策
- ・子どもの権利の啓発
- ・親・大人の学びの機会

性別や世代を越えて、 みんなで子育てを楽しもう。

「性別や世代を越えて、みんなで子育てを楽しもう。」性別や世代を越えて、みんなで子育てを楽しもう。性別や世代を越えて、みんなで子育てを楽しもう。

- 子育てと仕事を両立しやすい環境になっている。
- 子育てと世代と親世代が協力している。
- 多世代が交流し子育てや防災に強いまちになっている。

これから

- ・子育てボランティア等人材育成
- ・子ども子育てプラットフォーム
- ・子育て支援コンサルティング
- ・地域ネットワーク、官民協働

概要

学んだこと・感じたこと

「本人自身ではどうしようもできない状況に置かれ、誰にも「助けて」の声を上げられずにいる子どもや若者がいるという事実があります。そんな中、どんな境遇のもとにおかれた子ども・若者であっても、「すべての子ども・若者が自分の人生を自分で生きる」ことができる地域社会を創る』その言葉の通り、様々な状況に置かれた子どもを受け入れ、それぞれの子どもに応じた対応をしている自由をモットーにした施設です。

感想

部屋の隅で誰とも会話をしない子どもに対して、誘って会話するのではなく、遠くから見守るということを仰っており、居場所づくりにおいて何もしないということも必要であるということ学びました。それを受けて私たちは、子どもに対してどのように対応すればよいのか、居場所づくりをするために何をしたらよいのかということ悩んでいたが、それぞれの子どもに合った対応をするために、子どもを観察するというのが重要であるということ踏まえて、今後の活動に生かすようにしました。

自由をモットーにした施設であることが、施設で働いている方々の服装からも感じました。子どもからすると、大人はただでさえ堅苦しさをを感じる事や、緊張してしまうのではないかと考えたため、大人がスーツを着ていて、学校のような場所であったら、余計に話しづらく感じてしまうと思いました。しかし『TEDIC』は、木を基調にした広い空間であり、大人の服装もラフであるため子どもの緊張感が和らぐのではないかと考えました。このことから、居場所づくりには空間づくりも重要であると考えました。

石巻市子どもセンター らいつ

概要

学んだこと・感じたこと

子どもまちづくりクラブが考えた子どもセンターのコンセプトとして石巻の活性化のために中高生が中心となってつくり、運営していく施設であり、みんなが過ごしやすく、子どもの想いを世間の人たちに伝えられる場所です。出来た経緯として、震災直後2011年5月から6月にかけて、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン(以下「SCJ」という)は、宮城県、岩手県の子どもたち約1万人にアンケートを実施し、90%近い子どもたちが「まちのために何かしたい」と思っていることを明らかにしました。その声を受けてSCJが子どもたちに呼びかけ、岩手県山田町・陸前高田市・宮城県石巻市3つの地域で子どもまちづくりクラブが発足。石巻市では、2011年7月に石巻市子どもまちづくりクラブが発足しました。同年夏には、復興に向けたまちづくりをめざし、“夢のまちプラン”を作成し、そのプランを市に提案した。“夢のまちプラン”の中の色々な想いを1つにし、実現化したのが「石巻市子どもセンター」。地域と連携しながら子どもたちが企画・デザインを行い、2013年12月に完成し、SCJから石巻市に寄贈されました。寄贈後は、石巻市の児童館として運営されています。

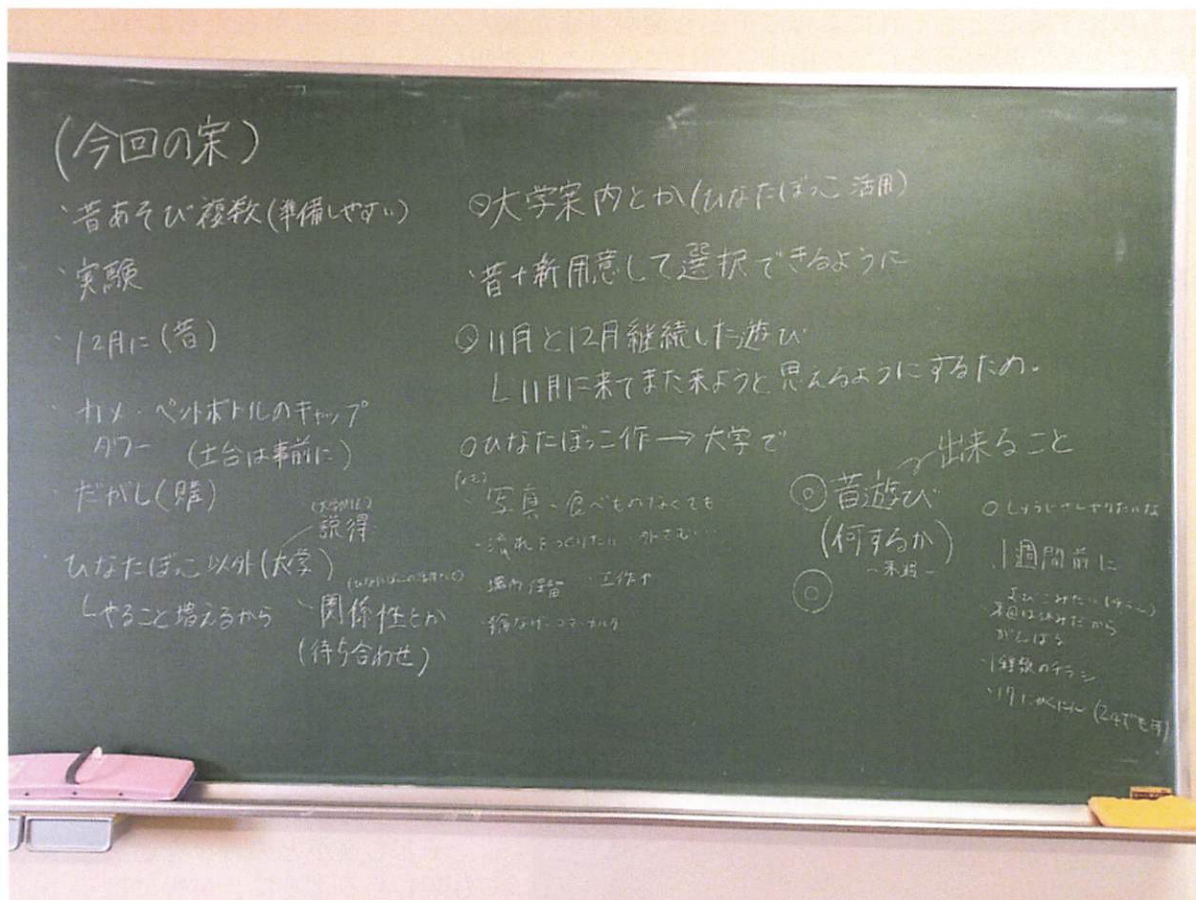
感想

昨年も見学をさせていただいた施設でしたが、前回よりコロナによる制限が軽減された活動内容を改めて知ることができました。らいつでお話を聞き、子どもの主体性について深く学ぶことができました。あくまで子どもたち主体で自由にイベントや決まりを作らせることで、積極性や自立心の確立を促し、年齢に関係なく公平に活動することができ、さらには施設内も子どもたちの意見が反映されていました。ここまで、子ども主体の施設は国内でも稀であるように感じました。そして、イベントをぎっしりと予定するのではなく余白を入れ、その期間で目的意識の共有や課題点や気を付けるポイント、かかわり方の確認を行うことにより全体的に質の良い活動を行うことができ、子どもの主体性をさらに尊重したものになると思いました。

第3章 11月の活動

目標・テーマ

「子ども達がやりたいこと」に合わせたイベントを実践する。
 「また参加したい！12月も来たい！」と思ってもらえる活動にする。



話し合った内容

これまでは、私達学生が考える、「子ども達が楽しんでくれること」をコンセプトに活動を行っていましたが、しかし、イベントで子ども達と会話をしている中で、子ども達により近い存在であるために「子どもたちがやりたいこと」に合わせたイベントの企画を考えるようになりました。6月の活動でやりたいことについて子ども達に聞いたところ、「お手玉、あやとり、クッキー作り、マグネット磁石、トランプ」が候補としてあがり、11月と12月で活動内容を分けながら実践することになりました。

加えて、夏休み期間の施設訪問によって、「居場所の空間は、様々な利用の選択肢があり、それを選択しないことも自由である」という学びを得ました。これまでの活動は作業やスペースを区切り、それに沿って遊びをしてもらった空間であったために、子ども達の予定外の遊びに対しての柔軟さが欠けていました。ひなたぼっこという空間の中で、子ども達が楽しく安全で快適に過ごせるように、子ども達が楽しめる遊びの選択肢を増やすこと、何もしない・ほかの遊びの選択肢を含めた空間も考えることから計画立案に至りました。

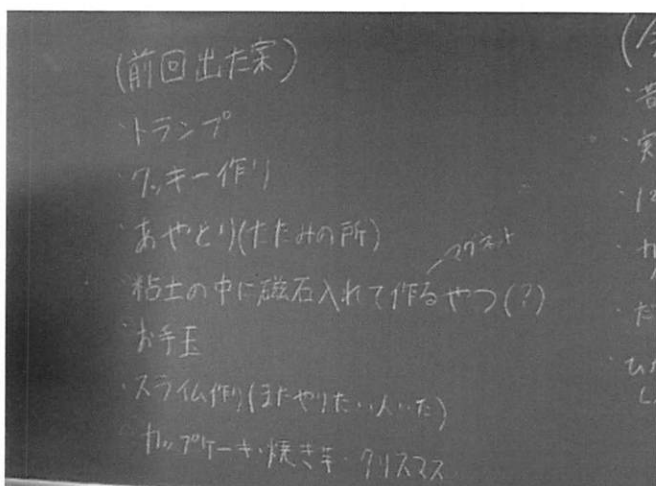
目的

6月の活動の反省も活かし、私達の活動の意義・役割などを考え、より子ども達に寄り添った遊びの実践を目的としました。また、11月12月と連続したイベント開催の予定であったため、11月と12月の活動との繋がり、遊びの連続性と挑戦性を考えたものにする事、それによって子ども達が「また来たい」と思ってもらえるようにすることで、居場所としての機能に繋げていくことを狙いとしました。

【活動内容】

遊び→ぶんぶんゴマ、カメラタワー、マグネット磁石
ビンゴ大会（景品あり）

どうしてその遊びの計画に至ったか。



子ども達に聞いた「やりたいこと」に沿った計画になりました。また、今回は、「子ども達の手元に形として残るものが欲しい」という思いで、製作のマグネット磁石を含めました。前回よりも遊びの選択肢を増やし、子ども達がどの遊びを選択しても楽しめるように、最後には一緒に楽しむ要素としてビンゴを取り入れました。

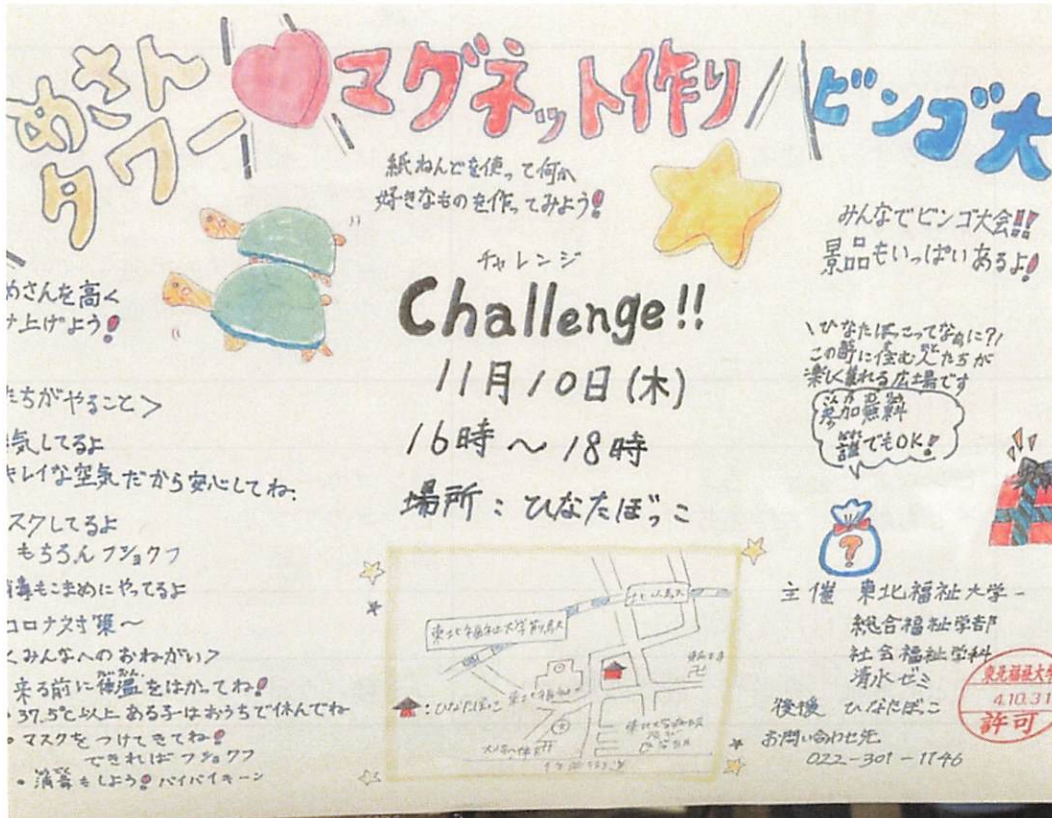
【準備段階での声】

- ・男女ともに楽しく遊ぶことのできる遊びを設定する。
- ・遊びの種類が増えたため、どのテーブルでどの遊びをやるのかを視覚的に分かる看板の設置が必要になる
- ・イベント前に実際に遊びを行って、学生ではなく子ども達の目線でできる遊びとその事前準備が必要。
- ・はさみなどの危険なものは大学生が扱い、机などに置かずに大学生が持ち歩く。

- ・準備・当日・片付けの役割分担をする。
- ・感染症対策の柵の設置をする。

【チラシ】

今回のテーマは Challenge！子どもにとっても大学生にとっても挑戦です。



<対象児>

ひなたぼっこを利用・場所を把握しており、
ひなたぼっこに徒歩で来ることのできる距離に住む子ども達

<チラシ配りの期間>

イベント前週の11月3日(水), 11月4日(木) 小学生の下校時間 14時～16時

<子ども達の様子>

- ・下校途中の子ども達は興味を持って大学生の話聞いてくれました。
- ・活動の継続によって、前回よりも知名度が上がったことを実感しました。
- ・今回は児童館にもチラシを置かせていただけることとなり、男女・学年問わず多くの子どもにチラシを渡すことができました。

【当日のスケジュール】

11月10日（木） 16:00～

時刻	活動	準備物
15:30	大学生 ひなたぼっこに集合	
16:00	子ども達到着	名簿
	①ぶんぶんごま ②マグネット磁石 ③カメラワウ	①（材料）レース糸、画用紙、クリアテープ ②（材料）磁石、紙粘土、絵具、ビーズ等装飾品、クリアファイル、新聞紙、筆 ③（材料）・カメ形の紙・ペットボトルのキャップ・両面テープ
16:45	片付け	
17:00	ビンゴ大会を始める。 子ども解散 大学生片付け	ビンゴカード ビンゴのアプリ 商品のお菓子
17:40	大学生は片付けを始める。	
18:00	子ども解散 見送り 最終の片付け	ゴミ袋 ウエットティッシュ

【活動当日】

参加人数 小学生 13 人
保護所の子ども 4 人
大学生 10 人

【当日の様子】

- ・活動開始前ではあったが、ひなたぼっこには子ども達が既に到着して、男の子たちは遊び 始めていた。
- ・来てくれた子ども達の人数と名簿を作りながら、準備をして、各遊び担当の判断で、遊び を開始する。



【ぶんぶんゴマ】

コマは回すのが難しく、大学生も試行錯誤しながら様々な大きさや形を用意しました。真っ白の土台に、子ども達が様々な柄で自分のコマを作っていきます。

「ハートの形がいい！」という子どもの要望に応じて個性的なコマがたくさんできました。

なかなか回らない中で、上手く回った時には学生も子ども達も一緒に喜んでいました。

【カメタワー】



実は一番人気だったのは、カメタワー。学生が用意したたくさんの真っ白なカメがどんどんカラフルで個性的なカメに変身していきます。

どこまで高く積めるか、大学生と競争です。大きさや形を考えて真剣に積み上げる姿は、遊びというより勝負。大学生も子どもに戻って真剣勝負です。



【マグネット磁石】



←粘土に色を付けるために
絵具を混ぜてこねます。

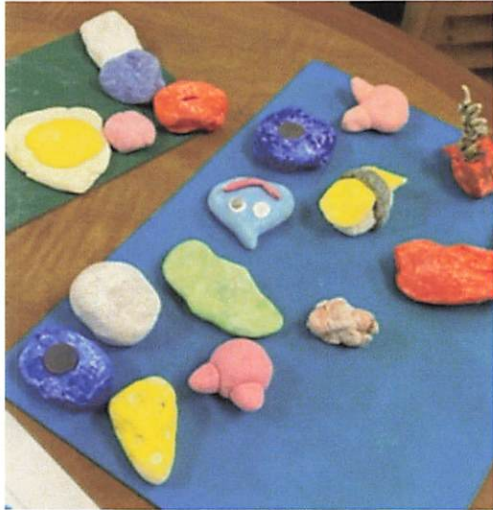
手袋を用意したり、内側におりこんで絵具が手につかないようにこねる方法など事前に用意していましたが、男の子たちは粘土の直接の感触を楽しんでいました。粘土同様に、自分の手が色々な色に染まっていくことも子ども達にとっては、面白い要素だったようです。

家や学校ではなかなか難しい、子ども達がやりたいように思いっきりできる活動。「子どもらしさ」を引き出せた活動になったのではないかと考えます。



↓絵の具の方が多すぎて手形ができました。





←大学生が作った見本と、子ども達の完成作品です。大学生の作った玉子のお寿司を見て、サーモンのお刺身を真似して作っていました。もう少し時間があればお寿司屋さんになっていたかも…。

【学生の感想】

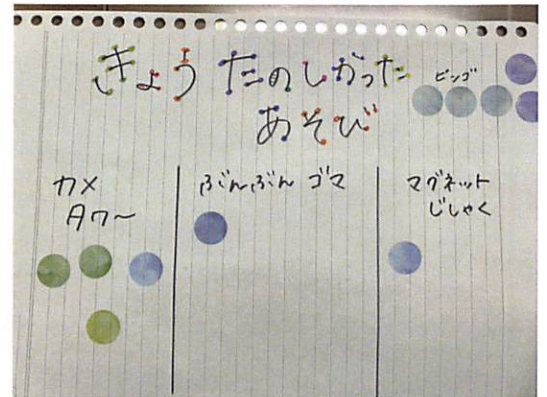
よかった点 各コーナーでの遊びについて

◇遊びの種類を増やしたことで、子ども達が遊べる幅が広がったと思います。

工作の活動は、ただ遊ぶだけではなく自分達で作るところから始まるため、今までとは違う関わりができました。思い思いの色を塗って、できたものを使って学生と遊ぶことで、この遊びが繋がっていることが実感できました。

◇前回の反省点を活かし、必要になりそうなものを準備できたことが良かったと思います。

◇一つの遊びでも何かルールを加えたりすることで、何種類もの遊び方ができたり、子ども達の反応も様々に見ることができました。



よかった点 ビンゴ大会について

◇初めてのビンゴ大会で不安もありましたが、学生の多くが声かけを行い、景品の受け渡し・親への引き渡しを行ってくれたことで円滑に進めることができました。

◇全体で楽しめる遊びがあったことが良かったです。普通はビンゴが成立したらそこで終了と思ってしまいがちですが、ダブルビンゴ、トリプルビンゴを目指して数字に一喜一憂する姿や、まだビンゴしてない最後の一人をみんなで応援する姿などがありました。バラバラにそれぞれのペースで遊んでいた場所がビンゴによって、保護所の子ども、小学生の子ども、大学生も一体となった空間となり温かい雰囲気だと感じました。

よかった点 運営・全体について

◇今回初めてアンケート用紙を作ったことで、子ども達が楽しかったことや次回活動への意欲を知ることができました。子ども達の気持ちを知ること、今後の活動にも還元していくことができると思います。

◇大学生の配置が良かったと思います。一か所に集中せず、各自の判断で必要な場所に動いていて、子どもが関わりやすいような配置が出来ていると感じました。

◇小学2年生の女の子が、「ビンゴやりたいから来た！」と教えてくれました。遊びの選択肢が増えたことで、子どもの興味をひく要素も増やすことができ、居場所にきてくれるきっかけを作ることが出来た点が良かったです。

改善する点

◇事前に決めた、準備に来る人が当日来ないことがありました。

流れやタイムスケジュールが把握できませんでした。

→準備段階での決定事項を、全員が確認できる状態で共有する

→ゼミのメンバー間で、予定を確認し、抜けているところは教え合う。

◇手についた絵の具（マグネット磁石）を洗い落とす時に、洗面台周辺が汚れることを想定していませんでした。

→子ども達は、直接手でこねて、手で感じて遊ぶことを楽しんでいた。

「子どもらしさを引き出すことができた」という結果からも、「手が汚れない」方向性を目指すのではなく、「手が汚れても対応できる」準備が必要。あらかじめ洗面台にタオルを準備することや、絵の具を使う際の注意点を子どもたちに伝えておく

◇たくさん子ども達が来てくれたことで、名簿の作成、子どもの行動の把握が大変でした。保護者の連絡先が分からない子どももいて、対応を考えるべきだと思います。

→事前に子ども達に、名前・連絡先を書いた紙を持ってきてもらう。

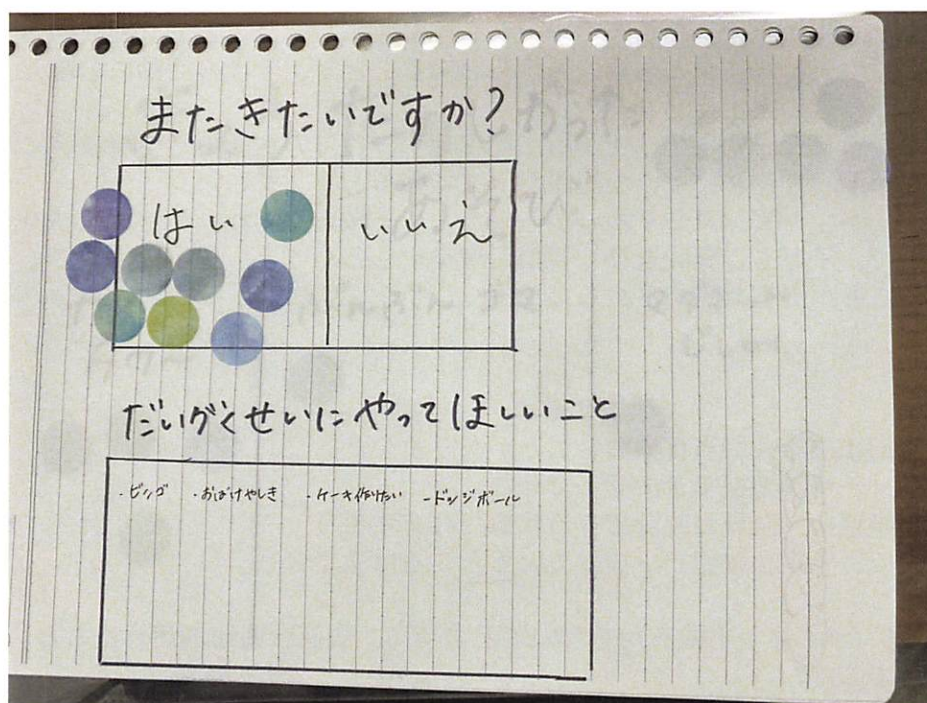
→名簿を作る学生を増やし、分担する。

気づいた点

◇準備の段階でカメラワーを男の子が楽しんでくれるのだろうかという不安が正直ありましたが、当日カメラワーで盛り上がりを見て、女の子だけではなく男の子も工作をして楽しむ事ができる企画をこれからも考えたいと思いました。

◇保護所の子ども達が、小さい子ども達と一緒に遊んでくれたり、迎えに来た保護者のことを大学生に伝えてくれたり、何も言わなくてもイベントを手助けしてくれていました。小学生でもない、大学生でもない立ち位置で、空間を繋いでくれていたように思います。

【11月の活動の振り返りと考察】



事前の共有不足や、想定不足はありましたが、当日の状況を見ると学生個人が一人一人考え、足りないところを判断して補い合い、声を掛け合っていました。イベントを通して、一人一人の状況に対応する柔軟性が高いことが分かります。だからこそ、もっと情報共有が盛んに行われていれば、事前準備の際の積極的な意見の出し合いがあれば、子ども達にとって今以上によりよい活動にすることが出来ていたと思います。今回は、11月12月と連続した活動だったため、11月・12月と担当メンバーを分けて計画準備が行われていました。その間での共有が上手くできなかったために生まれた改善点が多くあったため、担当を分けていても各時間の情報の共有を大切にしていきたいです。

6月から11月と、前は間が空いてしまったためにイベントに向けたモチベーションを保つことが難しかったですが、今回はそれぞれ生まれた考えや課題などをそのまま12月の活動での行動に活かすことができると思います。また、関わりだけでなく今回の改善点、反省を踏まえ、事前の12月の活動計画に反映することが必要だと考えます。

また、様々な遊びを用意し、多くの子ども達が来たことで居場所の機能が拡大したように考えています。「前も参加したから来た」「景品が欲しいから来た」「友達と一緒にだから来た」、子ども達が選択可能な目的を多く用意することができました。保護所の子ども達も含め、学年問わず多くの子どもが交流できる場所を確保することができました。

アンケート結果から、目標の1つであった「また来たい!」という声も見ることができます。1つの成果として次に繋げていきたいと思っています。

第4章 12月の活動

【計画立案に至るまでの経緯】

目標・テーマ

「大学体験♪どきどきわくわく!一日限定!?クリスマスパーティー」
クリスマスという馴染みのある行事と、大学という子どもにとっては馴染みのない場所を融合させて、普段体験できないような非日常を体験してもらう。

話し合った内容

6月、11月とひなたぼっこを活用してこどもの居場所づくりを行ってきました。活動の内容や子どもものリアクションにマンネリを感じたことから、12月は思い切って大学を活用して小学生と遊んでみてはどうかという、思い付きからこの企画が生まれました。大学を活用するというはこれまでやったことがなく、まずは大学を使ってもいいかという許可取りから始まりました。許可を得たうえで、企画書を作成しそれを大学側に通さなければならず、いくつもの壁にぶつかりました。一日のタイムスケジュールや、遊びの内容、予測されるけがや注意事項、教室の確保など、前例がない中での企画書づくりは至難を要しました。

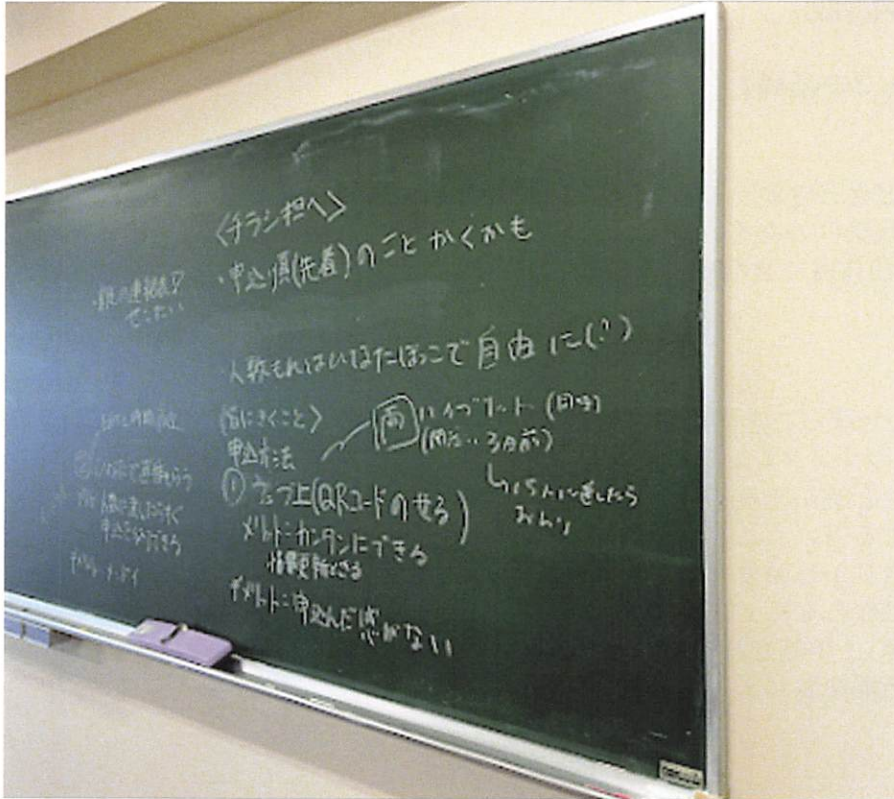
目的

大学という普段立ち入ることのない場所で、どきどきやわくわくを五感で感じてもらいたいという想いと、大学生にしか提供できない遊びの場というのを追求して、みんなが一緒になって体を動かし、遊んでもらいたいというのが狙いです。

どうしてその遊びの計画に至ったか

(カメタワー、むかし遊び、爆弾ゲーム、なんでもバスケット)

チームスポーツを通して絆が深まったり、一体感が生まれるように、体を動かしたりみんなで何かをしたりすることで、子どもたちと大学生の距離が深まるのではないかという意見からこのような遊びの内容に至りました。カメタワーは11月の活動の時点で、子どもたちから大好評だったため、12月も取り入れることになりました。むかし遊びは、6月に参加してくれた子どもたちからやりたいという声があり取り入れました。



申し込み方法についての話し合いの時の板書です。

↓実際に申し込み
に使用した Google
フォームになります。

申し込みフォーム

大学体験♪ ドキドキわくわく！一日限定?!クリスマスパーティー申し込みフォーム
※緊急連絡先の記入が必須になります。
※提供いただいた個人情報等は本事業の範囲内のみで使用致します。

アカウントを切り替える



このフォームを送信すると、メールアドレスが記録されます

*必須

メールアドレス *

回答を入力

お子さんのお名前 学年 *

回答を入力

申し込みフォーム

保護者の方のお名前 *

回答を入力

緊急連絡先 (ご家族の電話番号) *

回答を入力

大学の広報とゼミ活動記録のために写真を撮ります。個人が特定できない形で撮った写真を上記の使用に同意いただける場合、チェックを入れてください。

同意する

12月15日18時にひなたぼっこに保護者の方のお迎えをお願いしています。ご協力よろしくお願いいたします。

【準備段階での声】

(学生の活動報告より抜粋)

○準備の様子(苦労したこと 工夫したこと 大変だったこと)

教室での準備とひなたぼっこでの準備の様子

・チラシでの回収方法と、QR コードとのメリットとデメリットをみんなで書き出して、そのどっちも考慮できるようにしました。 ・みんなで役割分担をして、負担してもらうことが多かったので、情報共有は細かくしていたと思います。 ・大学での許可を得るために計画書を作ることや、様々な状況に対して対応を考えることが 大変でした。

・最初は子どもたちを大学に連れてくる際に 2~3 人ずつ連れてくる予定だったのが、全員 連れてくることになったのが大変でした。 ・教室の設営をやったが、テーブルなど把握できてなくて当日バタバタしてしまいました。 ・あやとりの適切な長さや子どもたちが折り紙で作れそうなもののレパートリーを考えることが大変でした。 ・ひなたぼっこでは、時間の逆算をミスしてしまいました。 ・遊びを行う上で考えられる危険の対策を考えました。

○当日の準備は何をした?どこを担当した?

・危険箇所を確認して、テープで保護をして、子ども達の動きを想定しながら会場を作りました。

・ひなたぼっこで、子ども達の名札を作りました。

・大学ではあやとりを担当しました。 ・風船遊びの担当だったが、鬼ごっこを担当しました。 ・子どもたちの行き帰りの引率をしました。

・主に折り紙で一緒に遊びました。

・安全確認を徹底して、声かけを行いました。 ・机を開くのに苦戦したので割とバタバタした感じがありました。 ・元々は折紙あやとり担当だったが、壁のでっぱり部分など子ども達が怪我をしてしまいそうな場所があったためそこに立ちました。

・子どもの移動を担当しました。 ・ひなたぼっこにきた子どもの検温や名前、電話番号の記入を行いました。 ・移動する時にひなたぼっこの片付け、忘れ物がないかの確認を行いました。

【活動内容】

カメラワー、むかし遊び、爆弾ゲーム、なんでもバスケット、氷鬼

【チラシ】

〈対象児〉 ひなたぼっこを利用・場所を把握しており、ひなたぼっこに徒歩で来ることのできる距離に 住む小学生

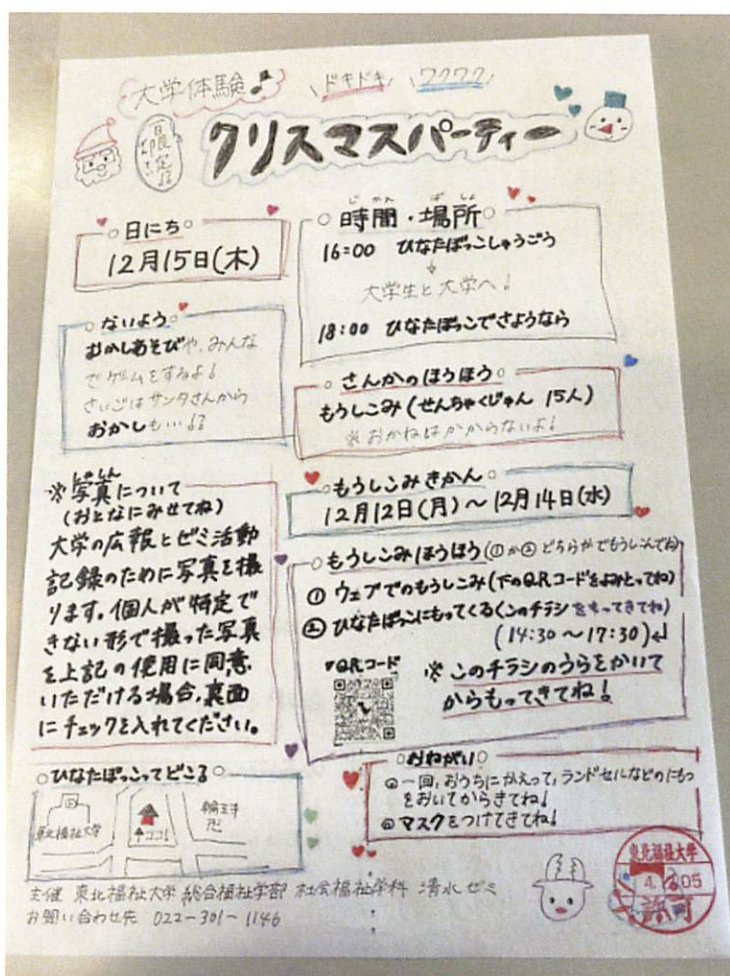
〈チラシ配りの期間〉

開催日前週の一週間

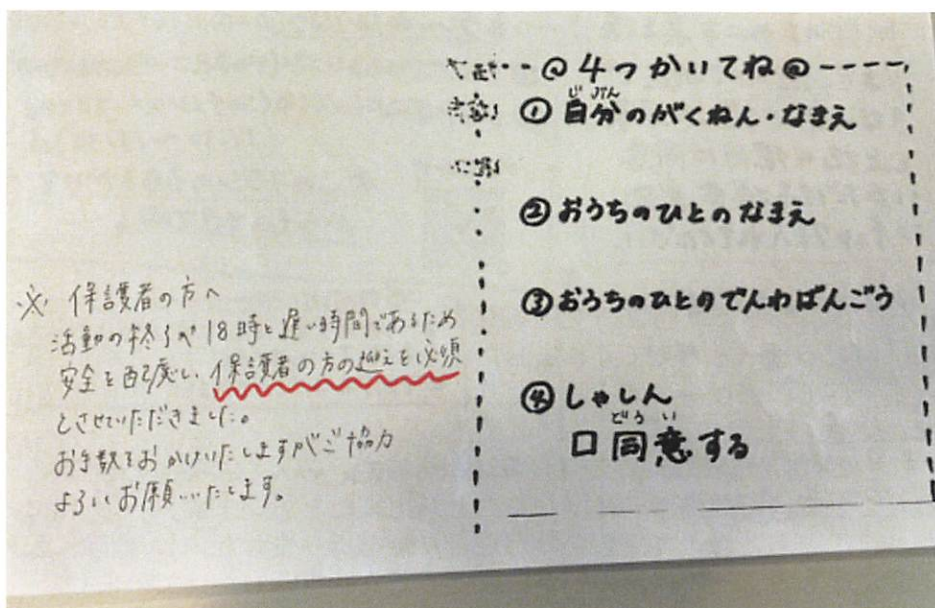
○チラシ配りの時の子どもの様子

時間帯と道を限っていたため、同じ子ども達が通って、昨日のお姉さん!チラシもらったよー!と言ってくれる子ども達が多かったです。申し込み方法が小学生の子どもに説明するには難解で、一通り説明はするが「お父さんお母さんに渡してみて!」と言うのが精一杯でした。でも、チラシをもらった子どもが、次の日に「行ける!」「行けない!」と言ってくれていたところを見ると、保護者に渡して理解してもらうことができたのだと思います。登下校の短い時間に、伝えたいことを一気に伝えるのは難しく、最低でも伝えたいことを絞って伝えることと、保護者の方に伝えること、子どもに伝えたいことなど、チラシのデザインも考えることが必要だと思いました。もうもらったという子が多くて、同じ時間帯と場所だと同じ子になってしまうなど感じました。今回は親の承諾が必要であったため、許してくれるかなと不安がる子どもも何人かいました。

【チラシの写真】



↑12月のチラシです。書かなければならない情報が多く、A4サイズの用紙に収めるのが大変でした。



↑用紙で申し込みをする場合の子のために、チラシの裏に申し込み欄を作りました。

【当日のスケジュール】

時刻	活動	準備物
15:30	大学生 H-one ホールに集合	
15:45	ひなたぼっこに子ども達を迎えに行く	
16:00	ひなたぼっこに子ども達到着 大学へ移動	名簿 体温計 名札
16:20	H-one ホールに到着	
	①昔遊び ②カメタワー ③自由遊び	① (材料) あやとり、折り紙 ② (材料) ・カメ形の紙・ペット ボトルのキャップ・両面テープ
16:45	片付け	
17:00	みんなでゲーム (なんでもバスケッ ト、爆弾ゲーム)	椅子、風船3つ
17:30	ゲーム終了 サンタさんからプレゼント	お菓子
17:45	大学出発 ひなたぼっこまで子ども達 を送る 保護者へ引き渡し解散 H-one ホールで残った大学生 片付け	ゴミ袋 ウエットティッシュ

【12月15日活動当日】

参加人数 小学生 16人 保護所の子ども 1人
大学生 12人

【当日の様子】

- ・前回も参加してくれていた小2の女の子と一緒に話した。顔を覚えてもらえていたみたいで、名前は何だっけーと考えてくれました。名札があったことで、これ!と文字で伝えることができ、何度か名前を呼んだり、呼ばれたりして、呼び合える関係性が心地いいなと感じました。
 - ・全員と濃く話すことは出来なかったけど、11月に引き続き、みんなで遊べる全体でのゲームがあったことで、時間内精一杯関わることが出来たと思います。・一緒にあやとりをしたり、子どもに教えてもらいながら折り紙を折りました。・危険に配慮しながら一緒に楽しみ、一時保護の子が一人だった為時折話しかけていました。・自分が担当した遊びはもちろん、フルーツバスケットや爆弾ゲームなどの遊びをまずは自分自身が子どもと同じ立場に立って純粋に楽しむということを大切にしつつ、なるべく多くの子どもと会話するように心がけました。・壁付近に立っている時は、ここちょっと危ないから気を付けてね!などと声掛けをしたり、フルーツバスケットの時お題が分かっていない子に対してこういう事だよと教えたりしました。・保護所の方は大学生がひなたぼっこに到着する前までの間に、参加する子の把握をしてきていました。
 - ・準備していた遊びはあったがそれ以外の遊びに自主的にルールを決めて遊んでいる子ども達が多かったため、子どもたちがはじめた氷鬼と一緒にしました。・みんなが名札をつけたため、名前を呼んだり、呼ばれたりしながら話をすることができました。
- 子どもとの関わり、当日の動きの中で大変だったこと、難しかったこと
- ・怪我がないように、環境整備はしていたけれど、当日の中で急に必要になったことなどへの対応が必要になりました。事前に限界があるからそれがあることを前提として、柔軟な対応が求められたけれど、誰かが気づいた時に、その時点でできる最大限をみんな アイデアを出し合いながらできたと思います。・当日の動きの中では、授業が早く終わったため設営に参加しました。分担はしてあったけれど、事前に決めた分担通りだと足りないところがあって、負担に偏りがでたところがありました。
 - ・人数が多かったため、時間通りに運営するのが大変でした。・誘導がスムーズにいかなくて難しかったです。・多くの子供がいて指示を出すときに落ち着かないことが多く、まとめるのが大変だと思いました。・楽しさの中でも、守れなければならぬルールを子どもたちに伝えることや人数が多かったこともあり、みんなが楽しむために1人1人の子どもに目を向けることが大変でした。・会場も広がったので、指示の通りにくさ、短い時間での充実度が不安点でした。・体育館みたいな場所だったので、子ども達が急に走り回ったり予定にない鬼ごっこを始めたりと想定外のことが起きて大変でした。しかし、そこは臨機応変に対応することが出来良かったです。フルーツバスケットや爆弾ゲームのルールを誰が説明するかなどをあらかじめ決めておくべきだったなと思いました。爆弾ゲームの時に、子ども達の残りたいという気持ちが強くて、ボールを持っていたのが私じゃなかったなどと少し揉めてしまった部分があったので、ジャッジをする人がいても良かったのかなとその場を見ていて考えていました。・移動が大変でした。熱を測るのに体温計が反応してくれなかったり、名札制作人が大変そうでした。・大学までの移動が大変で子どもの

興味を惹くものが多く、列から外れたりする子の対応が 難しかったです。 ・広い空間での開催だったので、いつもに比べて目を向けるところが多く、走り回ることも多いので、怪我する危険が高かったと感じました。 ・声がなかなか通らず、静めるのが大変でした。

○保護所の子とどんな関わりがあったか？

- ・保護所の子どもは、前回に引き続きの保護所の子どもだったため、元気?と気軽に話をすることができました。 ・みんなでゲームの時にも積極的に子ども達と話をしてくれていたし、子どもでも大学生で もない役割を果たしていましたが、保護所の子どもだからではなくて、その子だからできたことだと思います。 ・ひなたぼっこから大学に来る際に、大学を見学したことがあるかということなどを少し話 しました。
- ・一緒に小学生の子たちに指示したりしていました。 ・保護所の男の子がとてもフレンドリーで、周囲の小学生の面倒をよく見てくれて心強かったです。私たちは子どもの居場所づくりを支援するという立場であることから、どこか関係性が固く、その男の子の方が子どもたちの自然な笑顔を引き出す対応ができていたと感じました。 ・運営に協力してくれていたため、話すことはあまりなかったが、子どもとの関わりがなか で一緒に遊びました。

【活動の様子】



ひなたぼっこに大集合!

大学生に名札を作ってもらって、身支度を済ませていざ大学へ!

どきどきとわくわくがたくさん

詰まった、夢のような瞬間です!

大学の大きな門を潜り抜けて、大学の施設に潜入していきます! 大学内でばおしゃべり厳禁!というお約束もしっかり守ってくれました!



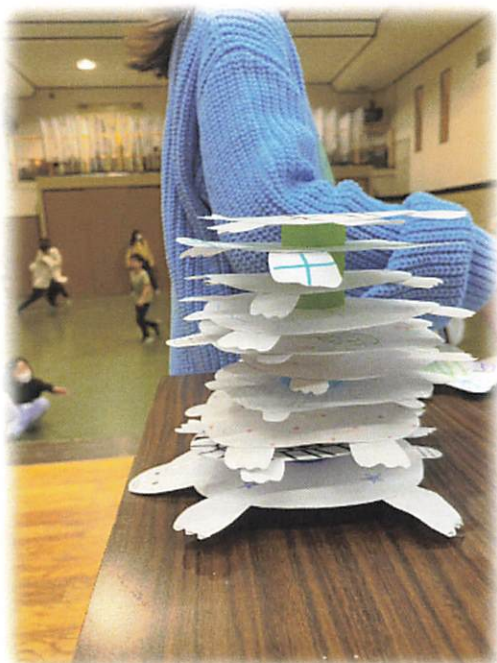
↑大学施設に入ったら、たくさんの大学職員さんがお出迎えをしてくれました!子どもたちみんなもそれに答えるように一生懸命手を振っていました。



↑目的地まではあと少し!先頭にいる大学生に続いて、2列になってトコトコ歩いていきます!もうすぐゴールだ!!



↑到着!ホールで待っていた大学生が温かく歓迎してくれました!さあこれから思
いっきり体を動かして目一杯楽しんでいこう!大学生との一日限りのパーティーの始
まりだよ!



↑フリータイムの開始!最初に紹介する遊びはカメタワー。たくさんのデザインが出来上
った後は、カメタワーにして高く積み上げる遊びをして楽しみました。ゆらゆら動くカメ
たちがかわいくもあり、ゲームを難しくしています!



↑2つ目に紹介する遊びは折り紙とあやとり!好きな形に折り紙を折って遊ぶ子や、あやとりを器用に操って遊ぶ子などむかし遊びにたくさん触れ合うことができました。そしてなんと広場の方では大学生と小学生が



一緒になって氷鬼をしたり、



風船バレーをして遊んでいる子たちもいました!



それぞれいろんな遊びを楽しんだ後は、みんなで1つのゲームをして楽しみます!1つ目のあそびはなんでもバスケット!円の中にお題を出題する人が「〇〇な人!」と言ったら、それに当てはまる人は席を移動しなければなりません!最後の一人にならないように大学生も子どもたちも必死です!

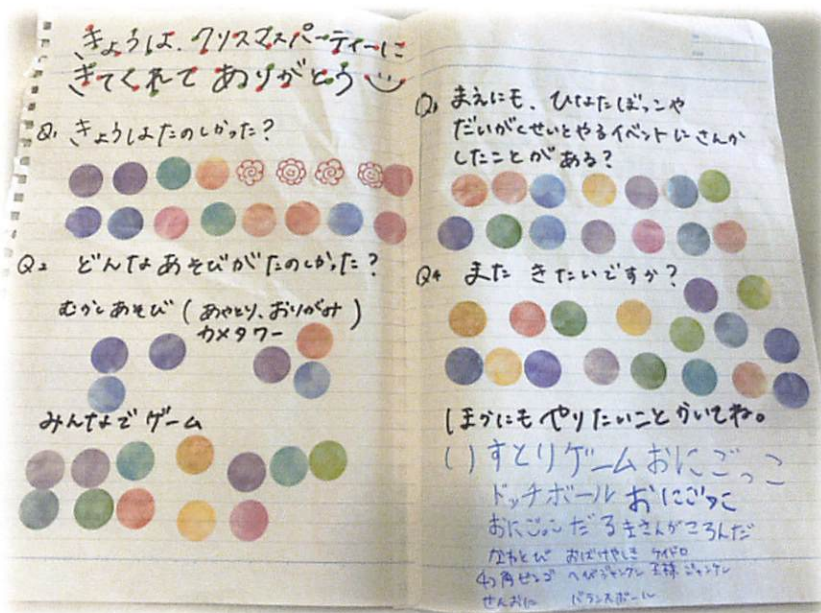


↑2つ目の遊びは風船を使った爆弾ゲーム! 割らないように慎重に隣の人に風船を渡していました。音楽が止まった時に風船を持っていた人は円の中に座らなければ

なりません、(笑) 順調に進んでいたと思いきや、、、音楽が止まった時に誰が持っていたかの判定が曖昧になってしまい少し揉めてしまう場面も。



↑たくさん遊んだ後は、大学生から子どもたちへささやかなクリスマスプレゼントを！そして子どもたちにもアンケートに協力してもらいました。お菓子はおうちで食べてね！というお約束もきちんと守ってくれました！素敵なクリスマス会になったと思います！！

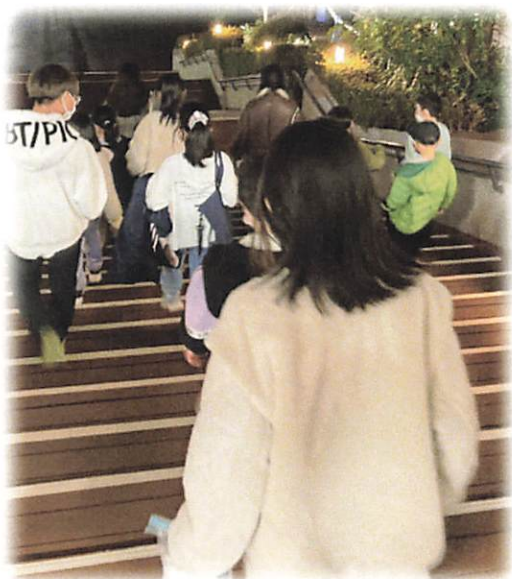


【子どもたちに向けたアンケートの結果】

- Q1 今日は楽しかったかな? 17 票
- Q2 どんな遊びが楽しかったかな? ・むかし遊び(あやとり、おりがみ、カメタワー) 6 票 ・みんなでゲーム 12 票
- Q3 前にもひなたぼっこや大学生と遊ぶイベントに参加したことがあるかな? 14 票
- Q4 また来たいかな? 17 票

Q5 今後ほかにやりたい遊びはある?

- ・いす取りゲーム ・だるまさんがころんだ ・おぼけやしき ・ケイドロ ・なわとび
- ・ドッチボール ・王様じゃんけん ・蛇じゃんけん ・四つ角ビンゴ ・せんおに
- ・バランスボール

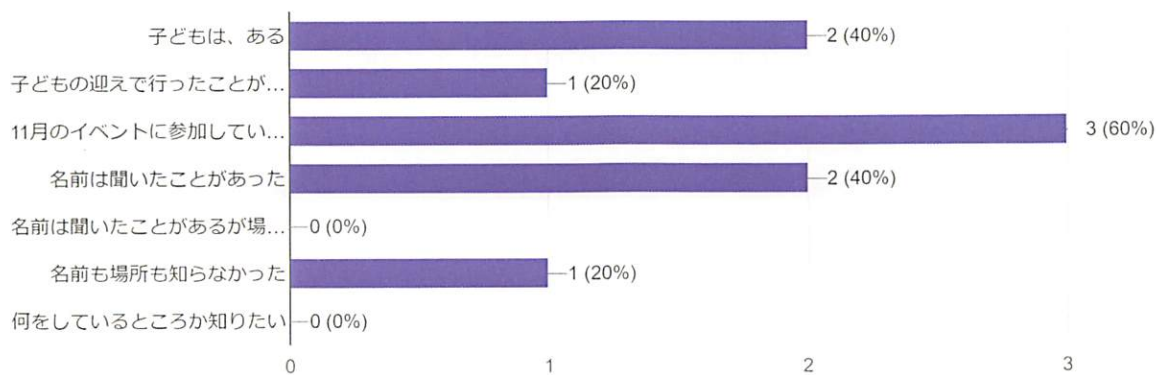


最後は大学生が引率をして、ひなたぼっこまで帰ります。楽しい時間もあっという間!一生の思い出になればうれしいです!

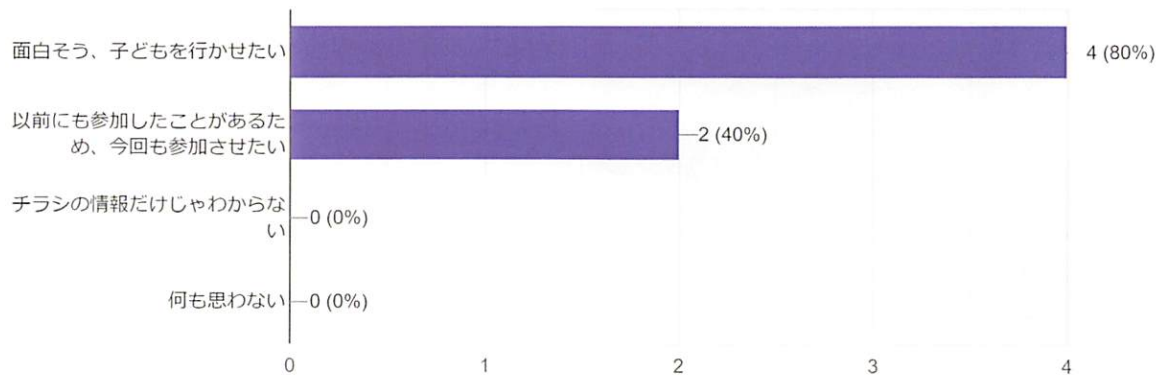
【保護者に向けたアンケートの結果】

クリスマスパーティーが行われた後に、参加してくれた子どもたちの保護者に向けてアンケートを行いました。

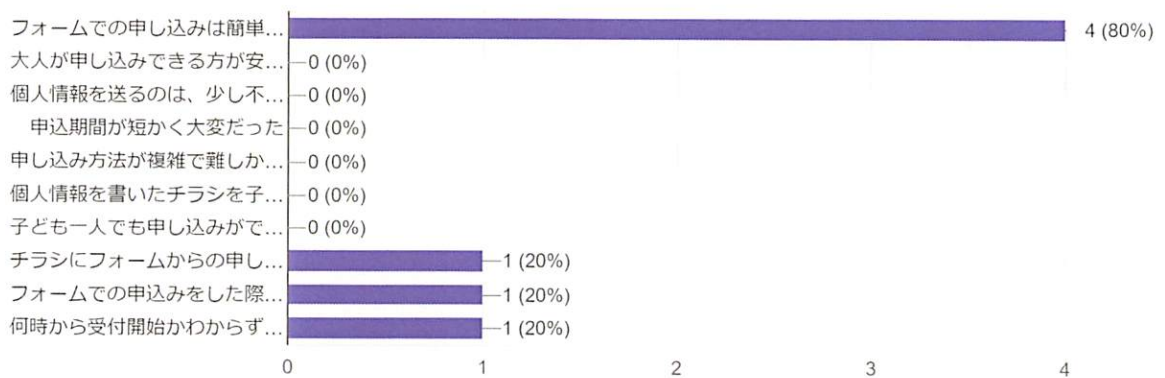
Q2 子どもの居場所作りを行う、ひなたぼっこの...こを利用したことがありますか。(複数選択可)
5件の回答



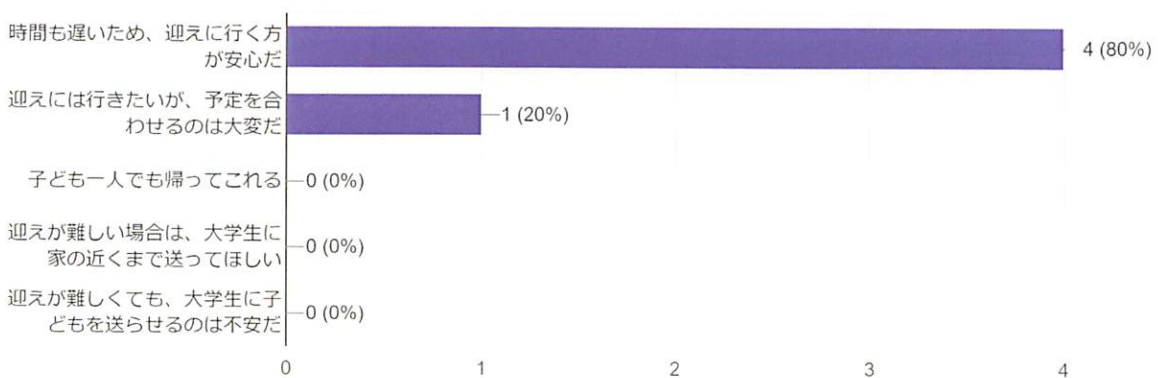
Q3 チラシをお子様から受け取った時、このイベントについてどう思われましたか。（複数回答可）
5件の回答



Q4 今回、チラシでの直接申し込みと、Googl...み方法についてどう思われましたか。（複数回答可）
5件の回答

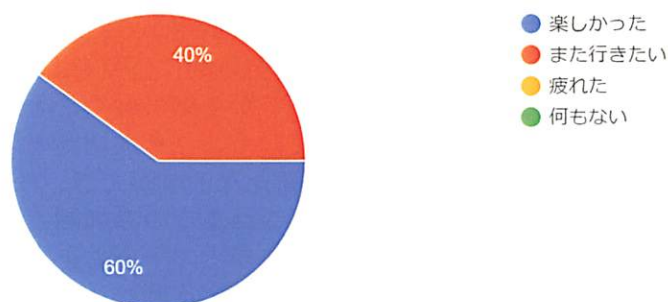


Q5 今回、18時にひなたぼっこに保護者の方の...お迎えについてどう思われますか。（複数回答可）
5件の回答



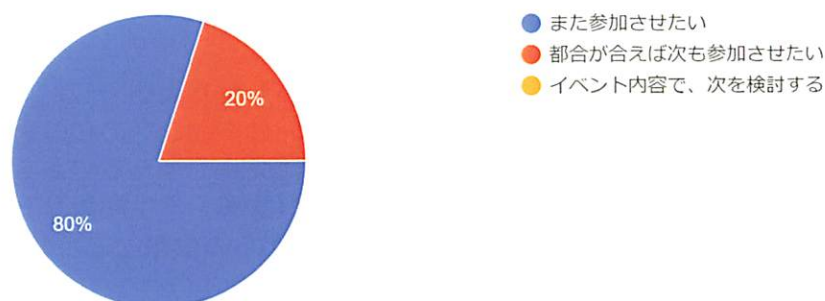
Q6 イベント後、お子様からクリスマスパーティーについて聞いたことはありますか。

5件の回答



Q7 イベント後、保護者の方はこの活動についてどう思われましたか。

5件の回答



Q8 その他、ご感想や学生へのご要望がありましたらご記入ください。3件の回答
先日は楽しいイベントを企画してくださりありがとうございます。帰り道子どもがずっと、「楽しかった!!また行きたい!!」と言っていました。要望として、未就学児、兄弟参加OKなど参加条件をもう少し詳しく知りたいです。

学区がひろく放課後友だちと遊ぶ機会がなかなかとれません。暗くなるのが早い冬の時期は尚更です。学生の皆さまのおかげでお友だちと楽しい経験を共有することができました。また異年齢交流もできて新しいお友だちもできたようです。本当にありがとうございました。チラシをもらえる場所を通らない。メールでも案内してほしい。もっと学生さんと交流させてもらいたい。親（私）が歳でなかなか全力で遊んであげられない。学生さんの若さを生かし、たくさん交流させていただきたい。

【学生の感想】

・初めて、大学という場所を使った活動を行いました。子ども達がやりたいこととして、走り回る活動なども、前回アンケートで出ていたため子ども達にとっても刺激的な活動だったと思います。その分、対応や対処などは多かったけれど、事前に多いことが分かっていたから万が一に備えての予測も考えられたと思います。11月、12月と続けて活動を行ったことで、子ども達と顔見知りになれたことが自分の中では大きいなと思いました。チラシ配りをして、イベントをして、もしかしたら登下校中にまた会えるかもしれないし、地域の子どもの顔を見られる関係性が出来たことがとても

大きいと思います。ただ、保護者の協力が必須というところは、今後も向き合っていないといけないと思います。

・今までの活動の中で、今回が一番子どもたちの生き生きした姿が見られたように感じました。場所が広がったのが良かったと感じました。ただ、準備がばたばただったので大変でした。計画書の作成やチラシの作成の期限が短かったので、それに間に合うようにするのが大変でした。危険箇所の把握を全体的に下見をした段階で察知しておくことが重要であると思いました。当日になってから気が付くことがやはり多かったので、前段階の準備の面に重点をあてて考えていくことも大切だと思いました。

・今回は、参加制にしたため学校に招くという新たな活動ができ、子ども達にとってもいい経験になったのではないかと思います。これまでの参加制ではないふらっと立ち寄れる居場所の良さも改めて感じられました。多くの子どもをまとめるというのはとても大変だと痛感しました。大学生の子どもに対する関わり方もまだまだ成長する必要があると感じました。

・ルールを守ることができなかつたために、別の誰かが嫌な思いをしてしまったことが見受けられたため、ゲームを始める前にしっかりとルールの確認や注意事項などを分かりやすく伝えることが必要だったと感じました。折り紙で作ったものを持ち帰る袋が準備できていなかったり、音楽の音量が小さくゲームが混乱したりしたため 1 つ 1 つの活動の

準備物の確認をしっかりとしていきたいと思います。

・校内での活動ということもあり、事前の準備がかなり大切でした。参加応募など 12 月担当の方々が 1 から行ってくれたため、新しい効率的なもの(QR)をつくりあげることができました。まだ工夫する部分はあるが、特に成長できた点であると思います。当日の運営でも、不備はまだまだあると感じました。(誘導、学生配置など)。しかし、子どもの参加人数、子どもたちの満足度、親御さんからの信頼など、着実に成果を出せたと感じました。

・場所が決まったのがギリギリだったため仕方のないことなのですが、もう少ししっかりと下見しておくべきだったなと思いました。今回は、初めての事前予約制だったので子ども達が来てくれるか不安だったのですが、予約定員が埋まる子ども達の予約があつてとても嬉しかったです。当日の誰がどこの準備をするかなどをもう少し詰めて話す必要があつたのだと思いました。想定外だった鬼ごっこ(氷鬼)にもしっかりと対応できたことは、とても良かったのではないかと感じました。

・12 月の企画立案に尽力しすぎたせいで、企画の準備そのものにあまり貢献できていなかったことに気付いていませんでした。全体で遊ぶ時にルールを無視した子どもや負けたくないばかりに泣きかけていたらしい子どもがいたそうなので、負けてもいいやっとなるルールを考えておけばよかつたかなと思いました。申込は初めてにしてはスムーズに行うことができ、いろんな家庭の子どもでも申し込めるようにしておいてよかつたと思いました。

・申し込み制にしたことで、事前に何人子どもが来るか把握できたので、備えることができよかつたと感じました。全体で爆弾ゲームをした時に音楽が聞こえにくかつたこともあり、どの子の所で音楽が止まったのが曖昧で、負けたくないばかりに涙目になってしまう子やその雰囲気を感じて音楽が止まった時に持っていたのは自分だと申し出る子がいました。ゲームで負けた時に嫌な気持ちになることがないように工夫できればよかつたです。いつもは施設内という狭い空間での活動で体を動かす遊びも難しかつたため、広い空間を使って、体を動かす遊びができてよかつたです。そして、決められたものに縛られずに、子どもたち同士でやりたいことを考えて、ルールを決めて、様々な年齢の子同士で 1 つの遊びを楽しむことができる空間を作ることができてよかつたです。

【12月の活動の振り返りと考察】

12月は、6月11月と一年間を通して行ってきた子どもの居場所づくり活動の集大成ともいえる活動内容でした。大学を活用して子どもたちと関わる場所を創るという、これまでチャレンジしたことのない取り組みを行うということに、楽しみと共に不安を抱かずにはられませんでした。大学からの許可をもらうために企画書を作成するところから始まった

12月の居場所づくりは、これまで行ってきたものとは比べ物にならないくらいの準備と覚悟が必要でした。ゼミ生みんなが力を合わせ一つになって作り上げたこの企画は、子どもたちの思い出の1ページに深く刻まれたことに間違いのないでしょう。それとともに、私たちゼミ生の心にも達成感や、自分たちの思い描いていたものが形になったという満足感が芽生えたはずです。

この一年間の居場所づくりの活動を通して、子どもたちに良い思い出を作ってもらうことが大切であることと同じくらい、私たちゼミ生がこの企画に全力で取り組み楽しんでいることが大切であると気づかされたように思います。今回の活動の中で、反省点やまだまだ改善しなければならない点はたくさんあります。今回の活動は、これからのよりよい居場所づくりを提供するための一つの経験に過ぎず、思い描いていることの実現に向けてチャレンジし続けなければいけません。私たちはこれからも学び続け、子どもたちにとって今より近い存在になれるように努力していきたいです。

第5章 報告会 & インタビュー

2022年度の活動を振り返るための報告会を1月23日（月）に実施しました。活動の総まとめということで、ひなたぼっこの職員の方もお招きし、インタビューもさせていただきました。



<学生の振り返り>

企画運営を考えたことで責任感が生まれて活動を終えた時の達成感がありました。課題としては、子ども達の予想外のアクシデントがあったため、それに対する事前の対処を考えておく必要を感じました。「ひなたぼっこの場所が分からない」という子どもや保護者にも周知することができたのではないかと思います。

子どもの居場所の支援には地域の支援が必須だと感じました。学校ではない第3の居場所として、年齢の近い大学生が子どもと対等に接する貴重な時間でした。子どもの目線に立って子どもの行動を予測することが難しかったです。これからも課題として考えていきたいです。

これまでに子どもと接する機会が少なく、「子どもと触れ合うこと」がどのようなことなのか、「対等に接することができているのか」と不安になりながら接していました。しかし回数を重ねるごとに子どもを支援するという立場に捉われず、「自分自身も楽しむ」ことが大切だと学び接していました。今後は子ども達だけではなく保護者の方にも知ってもらうことも視野に入れて考えていきたいと思います。

「放課後の子どもの遊ぶ場所が少なくなっているため今回のイベントは良かった」「異年齢間での交流ができて良かった」という保護者の方の考えも知ることが出来ました。終わってみて初めて分かった利点なども多かったため、今後に活かしていきたいと思います。今後の課題としては継続することだと考えます。名前を呼ぶ・呼ばれるという関係性ができたという今回の成果を継続することで居場所づくりに繋がると思います。

11月12月を通して、運営の方での参加が中心でした。企画や書類などに関して、大人を通すことの難しさを感じました。大変な思いをした分、「またやりたい」「また遊びたい」と言う声を聞くことができ本当に嬉しく思いました。大学の登下校で子ども達が、名前を呼んで駆け寄ってくれたこともあり、活動を通して覚えてくれて、相互の日常生活にも還元されていると感じました。

大学生の目線と子どもの目線の違いを学びました。その違いを踏まえた上で、企画運営することが必要だと思います。イベントを通して子どもの誘導の仕方がこれからの課題だと思います。単純な作業での声掛けですが、どのように声掛けをすれば子ども達が動きやすいかを考えて接していきたいと思います。

今年は活動にたくさん子ども達が参加してくれました。「何をしたら子ども達が楽しんでくれるかな」と考えて、実際の子ども達の声を取り入れることもできました。「自分の活動は居場所になっているのだろうか」と不安に思うこともありましたが、「また来たいまた遊びにきたい」という声を聞いて、自然と子ども達の居場所になっていたのだと気づき、やりがいを感じました。

学校とは違う空間で活動できるということの意義を感じました。活動で折り紙の担当でしたが、教えるつもりで準備していたら逆に子ども達に教えてもらい、一緒に楽しく活動することができました。走りたい子、落ち着いて遊びたい子、それぞれいたため、どちらも楽しめる場所を作れたことが良かったと思います。

自分たちの言動に、子ども達の反応があることが嬉しく、それは自分たちの言動の重要さということでもあると思います。また、「子どもの居場所作り」では「子ども」に焦点を当てて考えてきましたが、12月は保護者の方と接する機会もあり保護者の方とのコミュニケーションの大切さも感じました。これからも何を楽しんでもらえるのかを考え、居場所作りについて追求していきたいと思います。

子どもとの関わり方について、子どもの目線に立ちながら自分も子どもと一緒に成長することができたと感じています。どの地域を対象にするかで変わってくるという部分もあると考えます。そこに住む子ども達に合わせた居場所作りも考えていきたいと思います。

大学という場所を使うことについては、挑戦の部分が大きかったです。ゼロから作り出す経験は自分自身の力にもなったため今後にも繋げていけていけるものだと思います。また、学生達の行動力・対応力も回を重ねるごと上がっていき、連携という部分でも1年前と比べると成長した部分だと感じています。課題としては、役割分担をしっかりとすることで子ども達に安全な環境を提供することができると思います。

インタビュー



Q1

ひなたぼっこで大学生が活動するようになって、ひなたぼっこへの影響はありましたか？

→地域の人や子どもたち、親御さんにもひなたぼっこを知ってもらうことができたのは良い影響でした。

Q 2

大学生がひなたぼっこで活動していく中で、印象に残った出来事はありますか？

→回数を重ねるごとに大学生とひなたぼっこの連携が取れるようになり、最後には一体感が生まれるようになりました。一体感が生まれたことによって子どもたちが安心して過ごすことができるようになったと感じました。この人じゃなきゃダメだということがなく誰にでも気軽に声をかけることができるという関係性を作ることができたと思います。

Q3

大学生がひなたぼっこで活動する前と後で、ひなたぼっこに来る子どもたちに変化はありますか？

→イベントに参加してからひなたぼっこに来る子がいます。つながりが強くなって、今まで名前を呼ぶことがなかったが、向こうが八田さんと呼んでくれるようになりました。普段は忙しくて、「こんにちは」と声をかけることしかできていませんでしたが、イベントがあったことで職員と子どもの距離が縮まりました。イベントに参加していなくても、ひなたぼっこに絡めているということで、子ども達の中で一体感が生まれていると感じました。



Q4

保護所の子ども達と大学生が関わることで、保護所の子供たちに反響はありましたか？

→保護所の子はひなたぼっこでのカリキュラムがないので、自分で一日をどう過ごすのかを考えなければいけません。刺激のない生活が多いので、そこに歳の近いお兄さんお姉さんたちが来てくれることが、すごく安心して思っています。12月の活動に参加した子は、体が動かせるということで、面談を断ってもイベントに参加したいと言っていました。閉鎖的な中で、近い歳だからこそトラブルになることがあります。そこに大学生が来ることで、仲が悪かった子どもたちも出てきて、それをきっかけに部屋から出てくることのできた子どももいました。外の世界とかかわりを持ちたい子どもが多いので、刺激や癒しになっていると思います。

Q5

職員の方々は大学生のこの活動を見てどのように感じていますか？

→大学生の活動を見て、子どもたちに対して真剣に向き合うところを忘れかけていたと感じました。私たちも自分のことを振り返るということを考えるようになりました。

Q6

ひなたぼっこの活動で、もっとうしてほしかったこと、今後やれたらいいなと思うことはありますか？

→子ども食堂もやっているので「食」を絡めたイベントをやりたいです。子どもたちと食卓を囲んでいろんな話が聞けると思います。12月の活動のように「外出」というのも人数が足りないといけないことなので、やりたいです。また一時保護の子どもたちが、家庭復帰をした後に、ひなたぼっこに時々来ることがあります。そのタイミングで交流した大学生がいたらいいなと感じます。

第6章

まとめ

「私たちの活動は、本当に子どもの居場所となっているのだろうか」
私たちは昨年度も含め、2年間子どもの居場所作りの活動を行ってきました。しかし心の中では皆この疑問を持ちながら活動していたのではないかと思います。居場所の定義づけは難しく、子どもにとっての居場所であれば尚更、「どうすれば居場所になれるのか」を学生それぞれが考え続けていました。しかし、活動を終えて考えてみると、居場所の定義は人それぞれで良いのではないかと感じるようになりました。目的があってもなくても、ふらっと来られる、気軽に来られる場所としてそこにあり続けることが居場所としてのあるべき姿なのではないかと考えます。初めは「居場所を提供する者」として子どもと関わっていた私達ですが、子どもとの関わり方・居場所としての関わり方を学ぶ中で、立場を超えて対等に関わり、居場所の一員となることができました。対等に関わることは、意識したからできたことではなく、子どもと接しているうちに無意識にできるようになったことであり、これは子ども達が教えてくれたことだと思います。子どもの主体性を大切にしながら、子どもと一緒に居場所を作っていくことで、居場所は一方的なものではなく相互のものとなりました。施設見学では、「居場所は子どもだけではなく大人にも必要とされている場所」であるという学びがありましたが、居場所としての活動を行いながら、私たちにとっても「ひなたぼっこ」は一つの居場所になっていたのだと気づくことができました。

「ひなたぼっこ」の活動の中では、子ども達が学生たちの想像を超えてくる場面が何度もありました。最初は戸惑い、目の前の状況を把握することで精一杯でした。しかし、毎回の振り返りで改善点について話し合いをしていく度に、子ども達の「やりたい」という要望に臨機応変に対応することができるようになりました。それは、子どもとの関わり方の技術の向上という意味でもあり、子どもの主体性を尊重するということでもあると思います。

活動の中での最大の成果は、今「ひなたぼっこ」で活動をしている私たち福祉大の大学生だからできること、「ひなたぼっこ」だからできることに目を向けることができたことです。大学生という、子どもにとって年齢の近い第三者であること、だからこそ築ける関係性があることを学びました。そして、大学という場所の活用、場所の提供という新たな試みを実践することができました。そこには、大学への申請書類、安全の確保、「ひなたぼっこ」との調整、保護者の方の協力の必要性など様々な壁がありました。大人を通すことの難しさを実感し、様々な人の協力のもとに実現し

た12月の活動でした。結果的に周りの人を巻き込んで行ったことで、居場所としての活動を広げること、活動について知ってもらうことができたように感じます。私達の活動は全て、私達だけでは成り立ちませんでした。足りない部分を補うために周りの人の力を借りることで、私たちの活動は広がっていったように思います。それは、子どもの居場所作りの活動を行う上で重要な、地域との交流の考えにも応用できると思います。子どもの居場所としてのアウトリーチは、地域の協力を積極的に必要とこそ、地域の中の当たり前になっていくのではないのでしょうか。協力のためには、前提として関係機関の信頼関係が欠かせません。地域の中の子どもの居場所作りという観点からも今後学び続けていきたいです。私たちの活動が来てくれた子ども達にとって、「今日は、居場所でこんなことがあってね」と誰かに話したくなるようなほっとできる場所になっていたら嬉しいです。「誰かと共有したい」という想いは、私達のような学生や友達、家族や地域と繋がり合えるエネルギーだと思います。私達が作り上げた“居場所”では、喜怒哀楽、協働、団結、応援など、様々な空間を共有しました。私達の共有した空間が、誰かに話すことで広がり、子ども達が少し大人になって振り返った時に、少しでも意味のあるものになるようにこれからも学んでいきたいです。

参考・引用文献

「ひなたぼっこ」ホームページ <https://www.clc-japan.com/hinatabokko/>

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館 <https://www.kesenuma-memorial.jp/>

気仙沼あそびーばー <https://www.bouken-asobiba.org/play/asobiba-93.html>

ベビースマイル石巻 issyo <https://www.forbabysmile.com/issyo>
NPO 法人 TEDIC <https://www.tedic.jp/>

石巻子どもセンター らいつ <https://ishinomaki-cc.jp/>

大学生による被災地域における子どもの居場所づくりに関する
フィールドワーク事業 報告書

本報告書に関するお問い合わせは以下の連絡先までお願いいたします。

981-8522 宮城県仙台市青葉区国見 1-8-1 東北福祉大学
清水研究室
022-301-1146
f-shimizu@tfu.a.jp